

---

# **空想科学的・社会意義小説 魔法同志コミュっ娘コム**

境康隆

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空想科学的・社会意義小説 魔法同志「ミコの娘」ミコン

### 【Zコード】

Z3027Z

### 【作者名】

境康隆

### 【あらすじ】

フランソワ・ノエル・バブーフは貧農の娘。愛称はノエル。中学生三年生。悩み事は高校受験。強く明るい娘。

魔法皇帝が統治する冬の帝国で、母と二人で暮らしていた。

そんなノエルはある日、瀕死の虎の魔獣 ポチョムくんと出合う。

ポチョムとの出会いを機に、ノエルは帝国と己を翻弄する運命に呑み込まれていった。

# 一、フランソワ・ノエル・バブーフ1

「マルクス！ エンゲルス！ ノミンテルン！ 世界同時に革命よ！」

魔法同志！ ノミコつ娘ノミコン！ そうよ私は護民官グラキュース！

君のハートに！ チエ・ゲバラ！

一、フランソワ・ノエル・バブーフ

「貧農！」

少女はそう叫ばれると、石を投げられた。こめかみに鈍痛が走る。  
痛い

痛い。だが少女は声に出しては叫ばない。

彼らは 石を投げてきた少年達は、反抗的な態度を嫌う。いや反抗的な態度を誘っている。こちらが歯向かうような態度を見せれば、更に攻撃的に出てくるだろう。幸い石はかすめただけだった。我慢できる。

何よ、これぐらい

と、少女は口の中で小さく呪文を唱えると、痛みを和らげる魔法を使つた。

「やーい、貧農！ 貧農！ 悔しかつたらかかってきな！」

はやし立てる少年達は、皆、十をやつと過ぎたぐらいだ。少女より明らかに年下の少年達は、次々に石を投げてくる。

地方都市の舗装など、望むべくもないこの時代。投げるのに適した石は、文字通りそこら中に転がっていた。

少女は石をぶつけられようとも、彼らを無視して街をゆく。

少女がゆくのは、首都への街道を兼ねた、街の中央通り。高くても五階程までしかない、コンクリートやレンガ作りの街並が両脇に続いていた。

鉄道の路線からは外れてしまっているが、昔から首都へと向かう者が最後に立ち寄る場所として栄えた街だ。

石畳だが広い中央通りは、多くの行商の屋台でにぎわっている。多くの者が徒步か馬車だ。路面電車のような文明の利器は、首都のような主要都市にしかない。大人も子供も、皆が徒步と馬車での街をいき交いしていた。

そして幾人かはそのまま馬車で街を通り過ぎ、首都へと向かう。運がよければ自動車で移動する者が見られ、もつと運がよければ魔法で空を飛ぶ者にも出会えるだろう。

そんな科学と魔法がともに発達した時代の地方都市を、少女は紙袋を持って歩く。

少女は買い物帰りだ。塩を買っての帰り道。

塩は一摘みも無駄できない。下手に相手をして、こぼしてしまっては大変だ。

幸い近づくことを恐れた投石で、そつは当たるものでもない。こめかみに当たった一つぶでは、そこそこ痛かったが、まぐれ当たりだと思って、少女はぐっと我慢する。

「ひ・ん・の・う！ ひ・ん・の・う！」

少年達は石が効果的でないと見ると、一層言葉に力を入れた。この町は首都に近いお陰で、商業が発達している。その為戦争や反乱騒ぎで疲弊した他の地域に比べれば、まだ裕福だ。

そして少年達はブルジョワ 正確にはその親達が裕福 で、貧しい人間が自分達の豊かな町にやってくることが許せなかつた。貧乏がうつる。貧農の子供がやつてくる度にそう言い合つた。そして自分達よりひ弱そうな貧農の子供がくると、はやし立てて、追い立てた。

「……」

少女は気に留めないことにした。所詮子供の悪戯だ。そんなことより今は塩が大事だ。

「貧農！ こらー！ こっち向け！ 無視すんな！」

完全に無視された少年達はムキになる。別の貧農の子供になら、ここまでムキにはならなかつただう。

少年達は自分達が何故、ここまでこの少女にムキになるのか、『つち向け』と思つてしまふのか、『無視すんな』と望んでしまつのか、自分達でも分からなかつた。

少年達から見れば、今まさに横顔を見せて通り過ぎようとする少女は、随分とお姉さんに見えてしまう。

歳の頃は十四、五歳。その少女はツンとしまして、端正な顔を前に向けたまま、少年達の前を通り過ぎてしまふ。

「この……」

このままでは去りゆく少女に、完全に無視されてしまふ。相手にされない。

少年達は焦つた。

少女は明らかにみすぼらしい格好をしている。つぎはぎだらけの農作業服だ。自分達の家の使用人でさえ、あそこまで『つぎ』をあててしまえば新しい服を買うだらう。

ただのみすぼらしい農家の娘。少しからかってやつて、身の程を思ひ知らせて、自分達の鬱憤のはけ口にする それだけの貧しく汚い貧農の少女……

だが

その首都サンクトペテルブルクに降り積もる雪にも似た、白く柔らかな頬を、自分達の為に赤らめて欲しい。

その偉大なるコーラサス山脈の山々のような、気高くツンと尖った鼻を、自分達の冗談でくすぐすと笑つて揺らして欲しい。

その最北の不凍港マルマンスクで見つけたような、可愛いらしい貝殻のような耳で、自分達の自慢話を聞いて欲しい。

そう、だが少年たちは我知らず、少女を母なる祖国にたとえてしまつ。

それほど少女の美貌は、少年達の心を奥深くで捉えて離さなかつた。

少年達の心からの驚嘆と羨望による賞賛はまだ続く。

そう

その極北の地で見られると聞く、オーロラのようになスッと引かれた眉が、自分達に出会えたことを喜んで、ぴょんと一つ跳ね上がるのを見せて欲しい。

その母なるヴォルガ川のよつこ、淀みなく流れる黒く長く艶やかな髪を、自分達の目の前で揺らして欲しい。

そのシベリアの凍てつく空気もかくやと煌めく、触れば切れそうにも見える切れ長の目を、正面から見つめてみたい。いや、見つめられたい。

そして何より、その聖教会でお祈りする時に見上げる、イコンの生神女様　聖母様のよつな、可憐な唇で自分達の名を、いや自分の名前を呼んで欲しい

「……」

少女は平静を装っているのか、少年達の前を平然と通り過ぎる。少年達の羨望の眼差しを受けて去っていく。

少年達にとつてその可憐な少女は、退屈で窮屈で鬱屈な日常に舞い降りた、一人の天使だった。

だから少年の一人が、その少女の唯一の欠点を口にして、氣を惹こうとしたのも、やむを得ないことだったのかもしれない。

「こ、この……　ひ、ひ、ひ、貧

少年は十をやつと満たす短い人生の中での生涯最大の賭けに出た。

「ひ、ひ、ひ、貧　貧乳！」

「ツ！」

少女はキッと振り返る。

少年達は一瞬喜びに顔をほころばせた。聖母様とまで見間違つた可憐な少女が、振り返ってくれたのだ。少年達は賭けに勝つたのだと一気に紅潮し、そして　一瞬で青ざめた。

「何ですって！」

少女は怒りとともに、身を翻す。頬を紅潮させ、鼻息を荒くし、耳を引きつかせ、眉を吊り上げ、髪を振り乱し、目を血走らせる。冬眠に失敗した熊もかくやといつ形相だ。

怒りに血走ったその姿は、聖母様どころか鬼子母神だ。

「ギャーッ！ 逃げる！」

「こら、逃げんな！ 待ちなさい！」

少女は脱兎のごとく逃げ出した少年達を追いかけ出す。聖母のものと見紛わんばかりに可憐な唇は、食いちぎらんばかりに歯をむき出しにしていた。少女は大事な塩の入った袋すら、思わず放り出す。

「待て！ 待ちなさいってば！」

「殺される！」

少年達の淡い恋が今 終わった。

# 一、フランソワ・ノエル・バブーフ2

「塩……」

その大きな獣は、死にかけていた。飲まず食わざが何日続いただろう。水だけしか口にしていない。いや正確には雪だ。母なる大地に降り注ぐ恵みの雪。農家には恨めしいだろうが、この雪だけが、その獣の命を繋いでいた。

「恵みの塩か……」

獣は目の前に落ちている塩の入った袋を見つめる。顔を近づけてその目で見ないと、塩かどうかすら分からぬ。獣特有の自慢の鼻は、衰弱のあまり全く利かなくなっていた。

だが確かに塩だ。海に投げ出された時は、その塩辛さが恨めしかった塩だ。塩水はいくら飲んでも、喉を潤すことはない。むしろ焼けるような喉の痛みを呼び起こす。

塩を見て、この獣はあの時の喉の痛みを思い出した。

そして何より大量の塩水を飲んで、海に沈んでいった反乱の同志達を思い出させられた。

ありがたい。そう素直に思いながら、獣は一口塩を舐めた。塩は命に不可欠な物だ。だが彼のように飲まず食わずの状態では、どうしても不足する。しょっぱい味が舌とその身に染みた。

彼の反乱は失敗に終わった。船上での反乱。

攻撃を受け、仲間は皆海に投げ出された。

多くの者が海に呑まれ、生き残った仲間ともはぐれた。獣の身でありながら、軍属であり、貴族の称号すら得ていた彼も、今や追っ手に追われる身だ。

塩を舐め獣はやつと一息吐いた。

皆近寄つてこぬかと、獣は辺りを見回す。

久しぶりの塩分だ。生き返った気がした。周りを見る余裕が生まれた。首都郊外にある小さな街。申し開きの為に首都に向かってい

たが、その手前の街で力尽きようとしている。

町中に入るのは危険だと思っていた。だがどうせ死ぬのなら、にぎやかなところで死にたい。そもそも思っていた。多くの人々に囲まれた、幸せな時代を懐かしんでの望みだった。

だが今は誰も近寄つてこない。遠巻きに様子を窺っている。死にかけの、傷だらけの、薄汚れたアムールタイガー。体長四メートルにもなろうかという、その巨体には、誰も近寄つてくるはずはなかった。

「分かつた……去るひ……」

誰に聞かせるでもなく、獣は小さく呟く。

貴族に列せられていた時は、子供達が我先にと駆け寄つてきた。まさに飛びついてきた。他の貴族達は敬意を持つて接してくれた。子供達は競い合つように、彼の背中によじ登つた。

幸せな思い出だ。

獣は町を去る為に、体を翻そうとした。ガクッと上体が傾く。左前足に力が入らなかつたのだ。情けないことに体勢を整えることができず、顎から冷たい大地に落ちてしまった。

「クソッ……」

獣は悪態をついて体を起こす。目がかすむ。

もうダメかと、獣は覚悟を決める。だが、ここではと獣は最後の力を振り絞る。

町の住民は怯えている。ここでは死にたくない。弱気になつて人恋しくなつたが、どうも彼らは歓迎してはいないらしい。

獣は己に残された力を絞り上げるように顔を上げた。ぼんやりと少女が走つてくるのが目に映る。いつか見た光景だ。獣が姿を現すと駆け寄つてきた子供達。

ついに幻覚が見えるようになつたらしい。

「幸せな思い出の中での死ねると……」

獣がまさに、これが最後と目をつむりうつとしたその時

幻覚の中の少女は駆け寄つてくると、飛びついて

# 一、フランソワ・ノエル・バブーフ③

「何ぞらすのよ！　このケダモノ！」

少女は走ってきた勢いそのままに飛び上ると、自分の何倍もあるようなアムールタイガーの顔に、両足の裏を食らわせた。

「ガハツ！」

獣は一気に目が覚めた。寒さと空腹のあまり、眠りかけていた。この極寒の国『冬の帝国』で、街角といえども眠ってしまうことは命がない。

実際死の覚悟をした。

だが今の一撃で、あつという間に氣合いが入った。目が覚めた。「何をする！」

獣は自分の顔にめり込んだ、少女の足の裏を振り払って叫ぶ。自分でも、先程まで死を覚悟していたとは思えない程の大好きな声だった。

少女は軽やかに着地する。足を振り払われたとは思えない、鮮やかな身のこなしだった。

少女は衝撃を膝を折つて吸収すると、何事もなかつたかのようにすっと背筋を伸ばす。

その少女の後方には、頭に無数のたんごぶを作った少年達が、山のようになに折り重なっていた。

少女はそのまま自分が不注意で落とした塩を舐めていた、巨大な獣を見上げて口を開く。

「あら？　人語が理解できるのね。まさか……」

「いかにも。ワシは魔法のマスコット猛獸 戰漢せんかんポチヨム……」

獣はそこで言い淀んだ。こんな町中で、本名を大声で名乗り上げようとしている。國に追われる身としては、正気の沙汰とは我ながら思えない。何か調子がおかしい。

「？　何よ？　ポチヨム　何？」

少女は言い淀んだ獸に、その先を促した。周りに市民が群がる。  
誰も近づいてこない。

彼らが近づいてこないのは、先程までならその獸の放つ『忌み』  
の雰囲気によるものだらう。関わってはいけないといつ暗黙の了解  
だ。

今は違う。それは王者に対する『畏怖』に変わっている。近寄り  
がたい王者の氣だ。獸の放つ威圧感はそれだけ圧倒的だった。  
だが少女は臆するところがないようだ。自分を見下ろす獸を、怯  
まず見上げている。睨み返している。正義は我にある。その堂々と  
した顔は、まるでわうとも言いたげだ。

「ワシは…… ポ…… ポチヨ…… ポチヨ…… ポチヨムくん……

…

獸は思わずウソをつく。だがそれほど本名とは、かけ離れていな  
い。言つた端から、しまつたと獸は思つてしまつ。

「ポチヨムくん？ ガタイの割に可愛い名前ね」

「そ、そうか？」

ポチヨムと名乗った獸は困惑する。

軍属でもなくなり、ましてや貴族でもなくなつた自分はただの獸  
だ。怖がられて当たり前だ。それなのに目の前の少女は、全く臆す  
るところがない。

「私はノエル。フランソワ・ノエル・バブーフ。ノエルって呼んで。  
名前の可愛さなら負けないわ」

ノエルと名乗った少女は自分の名前が自慢なのか、自信満々に鼻  
を鳴らす。

「フランソワーズ……

「フランソワ！ フランソワ・ノエル・バブーフ！ ノエルよ！」

「しかし、フランソワは異国の名前で、確かに男性につけるものでは  
？」

「いいのー。私は氣に入っているの！」

「そ、そうか。分かった、ノエル殿か

「殿つて何よ？ かたつ苦しいわね」

「そ、そつか？ そうだな……」

かと言つて元貴族にして元軍属のポチヨムには、柔らかい話し方などできない。とりあえず頷いた。どうもこの少女は人のいや獸の調子を狂わす。

「それより…… それどうしてくれるのよ」

ノエルは地面に落ちた、塩の袋を指差した。

「ん？ あの塩は、お主のだつたのか？」

「そうよ」

「それは申し訳ない」

「申し訳ないで済むの？ 破れてるじゃない」

「えつ、それは最初からでは？ 落ちた拍子に破けたのではないですのかな……」

「お黙り！ 言い訳なんて男らしくない！ あなたに責任がないって言つの？」

ノエルはズイッと前に出た。

取り巻いた市民がじよめぐ。ちょっと獸が顔を前に出せば、食われてしまつような距離だ。実際この虎の口は、少女の腰から上など一呑みに見えた。

「グッ…… 確かにワシも一口、いただきはしましたが……」

「でしょ！ 弁償してもらいうからね！ ポチヨムくん！」

「べ、弁償ですかな？」

「ふふん、そうよ。高くつくわよ……」

ノエルはポチヨムを見上げながら、不敵な それでいて屈託のない笑顔を向けた。

## 一、フランソワ・ノエル・バブーフ4

時はユリウス歿一九@\$年。

国はその名を聞けば、誰もが思わず身震いするという『冬の帝国』。

その名の通り、冬が長く続くこの国では、人々の暮らしは貧しかった。多くの者が、今田の暮らしの糧を求め、明日の希望のあてを探していた。

長年続いた魔法皇帝 マジカル・ツアーリを頂点とした帝政政治は、多くの分野でそのシステムが悲鳴を上げていた。一度特権を得た者はその既得権益を手放そつとせず、己を守る為にその力を使つた。そして貧しい者はその貧困故に、僅かな蓄えも残すことができない。

その結果一部の者は富み続け、多くの者は飢え続けた。  
だがそれももう、限界に近い。一部の夢想家の「絵空」とと考へられてきた『社会意義』革命。『空想科学的社會意義』を唱える過激派 革命論者が、日に日に力を増していた。

彼らは言つ。『絵空』ことで結構。空想科学的と思われる程の社会意義こそが、暮らしの糧であり、希望のあてなのだ』と。

国の方々で、暴動や反乱の噂を耳にする日々が続いた。多くが自然発生したものだが、その内幾つかは彼らに率いられたものだった。混乱の続く冬の帝国。今その国で一人の少女の運命が、大きく動き出そうとしていた。

父は幼い頃に亡くした。今は母と一緒に暮らししている。暮らし向  
た。  
フランソワ・ノエル・バブーフはノエルと呼ばれている。

魔法の力が人々の生活を左右する世界で、貧農の娘として生まれた。

きはよくない。借り物の畑に幾ばくかの種を蒔ぐが、母娘がやつと食べていけるだけの実りしかない。

「ノエル……願書はもらってきたの？」

ノエルの母 マリーは、もう何度も訊いた質問を繰り返した。今日娘に町まで塩を買いにいかせた。ついでに高校入学の願書をもらってくるようになり、言いつけておいたのだ。

九月の入試まで後一年を切ったというのに、娘はまるで関心を示さない。そして吹雪の中を家に帰ってきた娘は、むしろ母の担当である願書らしき物を持っている気配がまるでない。

「何言つてるのよ？ お母さん。高校なんていって」

娘は ノエルは、何度も返事をした内容で答える。

高校は自分には過ぎた望みだ。ノエルはそう思つている。自分が中学に通っていた分、農作業を手伝う時間が削られた。それすら心苦しいと思つていた。

貧農の子は皆事情は同じで、多くの者が小学校までしか通っていない。この近所の貧農の子供で、中学校に通っていたのはノエルだけだ。

中学だつて贅沢だつたのだ。ノエルはそう思つ。

ノエルは家に帰つてくるなり、願書の話をし出した母の、心遣いに内心感謝する。だがやはり、高校にはいかないでおこつとも思つている。

「いつも言つてるじゃない。それより、ひどい吹雪だつたわ」

ノエルは自分の肩に降り積もつた雪を払つた。

町から帰る頃には、外はひどい吹雪になつていた。

「ダメよノエル。少しでも上の学校にいかないと…… いつまで経つてもこんな暮らしよ」

凍えた優しい娘の為に、マリーは台所でシチューを温め出した。具など僅かばかりしか入つていない。ただ温まる為だけの夕食だ。

「でもお母さん。どうやって学費を払うのよ？ 私が学校にいくつてことは、それだけ働き手がいなくなるつてことなのに……」

今日の「」飯にも事欠くような、こんな暮らしさは確かに抜け出したい。だがこんな暮らしだからこそ、高校にいくような余裕はないのだ。

母が時折、空のお碗をかき込んで、娘の前では「」飯を食べた振りをすることがあるのを、ノエルはちゃんと知っている。

ノエルは母がシチューの為に背中を見せた隙に、買ってきた塩を小さなビンに移し替えた。しおらしいことを言いつつ、この隙を狙つていた。破く、こぼす、舐められる の、己の散々な失態を知られないように、ノエルは素早く塩を移し替える。

「それは……」

「いいの。分かってる。うちにそんな余裕はない」

「ノエル……」

「いいのよ。中学に通わせてもらつただけで、私は幸せ

「……」

「でね、聞いて。いいもん拾つちやつた」

ノエルは嬉しそうに微笑む。隠し事をしているのを暗に示すかのように、両手を後ろに隠した。そのまま上半身を前に屈めて、母の様子を上目遣いに窺う。

「何？ ノエル……」

「へへん」

「お前がそういう顔をする時は、ろくなことがないのよね」

「何言つてゐるのよ、お母さん！ 今日は凄いんだから！ おいで

！」

ノエルの命運とともにドアを開け、玄関から姿を現したのは、巨 大なアムールタイガーだ。

「きやつ！ 何？ ノエル！ と、虎？」

「そう、虎よ！ お母さん！ 激いでしょ？」

そう、小さなドアから身を乗り出したのは、人を一番みにせんばかりの巨躯を誇る虎だ。

「ノエル殿

「

その野獸は凜々しくも人語で呼び掛けると、我が身に降り積もつた雪を振り落とす。

「こ、この天候で……そ、外で……待機というのは……」

そしてそうとだけ言うと、死相を浮かべた顔で前のめりに家に倒れ込んだ。

## 一、フランソワ・ノエル・バブーフ5

「なっさけないわね！」

ノエルはポチョムの額をペチンと叩いた。

部屋の中で寝そべっているポチョムの眼前に、ノエルは膝を合わせ、ペタンとお尻を着いて座っていた。両足のかかとは、かなり外側に開いている。ノエルは体が柔らかいようだ。

顔だけで一抱えある　そんな巨大な顔の持ち主を、ノエルとマリーは家の中に引っ張り込んだ。

ポチョムは自分で動こうとしたが、意識がもろもろとして思うように体が動かなかつた。

だが意外なことに、一人だけでポチョムの体を運んでしまう。もちろん腕力でしたことではない。一人の魔力がポチョムを運んだのだ。

ポチョムは一人の魔力に、失いかけた意識の中で感心した。

「野生動物でしょ？　シベリアの虎でしょ？　ネコ科最大でしょ？　体毛長いんでしょ？」

ノエルは『』の数だけ、ポチョムの頭を平手で叩いた。その額の感触が気に入つたようだ。

「詳しいですか」

ポチョムはまた素直に感心する。部屋のぬくもりで、息を吹き返してきた。危うく家の灯りを前にして、また凍死しかけた。

夢中になると、ノエルは周りが見えなくなるようだ。だが、基本的には賢い娘らしい。そして叩かれても不思議と腹が立たない。

「ノエルは勉強ができるの」

マリーが嬉しそうに笑う。暖めていたシチューを、ポチョムの為に更に熱している。焦げないようにと、マリーは丹念に鍋をかき混ぜた。

「それにそれ以前に、魔法のマスコット猛獸

魔獸でしょ？」

ノエルはポチョムのヒゲを引っ張った。引っ張りやすそうに伸びていたから、引っ張ってみた。そんな感じの無造作な動きだった。相手の痛みとか、都合とか、自尊心とか、そんなことは気にならない

「そう気がつかないし、気にならない。そんな引っ張り方だった。「それを言われると面白い」

頬の毛皮がピンと引っ張られるのを肌で感じつつ、ポチョムはされるがままに身を任せた。少々痛いが、やはり腹は立たない。ノエルは不思議な娘だと、ポチョムは思った。

「お腹空いてちゃ、誰だつて力が入らないわよ」

マリーが湯気とともに立ちこめる鍋の香りを満足げに嗅いだ。元より広い家ではない。玄関を開けたらすぐに台所だ。ポチョムはドアのすぐ横で、そして台所のすぐ前で床に伏せている。ポチョム一人で、この部屋はいっぱいになっていた。

食事もこの部屋でとる。テーブルは立てかけて、脇にビケた。

「ふわふわのもとい！ ごわごわの毛皮！」

ヒゲを引っ張るのにも飽きたのか、ノエルが嬉しそうにポチョムの毛皮に顔を埋めた。

「ムツハーツ！ 獣臭ツ！」

そしてノエルは顔をしかめながらも、嬉しそうに顔を上げる。

「これ！」

「がはは。構わんですよ」

「そうよ！ だつて本当なら、獣臭どこりか、死臭を漂わせてるところだつたんだから！」

「これ！ ノエル！」

「がはは。そうですな」

「恩返しに、バンバン働いてもらつからな。ポチョムくん！」

「これつ！ ノエル！ もうすいませんね、ポチョムさん。ほら、召し上がって下さい」

マリーが振り返り、寝そべるポチョムの前にシチューを鍋ごと置いた。

「いや……しかし……」

「遠慮しなくていいぞ！ ただし、ただ飯は、今日だけだからな！」

「ポチョムくん！」

「これ！ ノエル！」

「ウヘッ！ あれ、お母さん私のは？ ポチョムくんに鍋ごと渡したら、私の分がないよ」

「大事な塩を放り出して、ブルジョワの子供追いかけのよつた娘は、干し芋で十分です」

塩は結局あの後、少しずつこぼしながら家に持つて帰ってきた。せつかく内緒で塩をビンに移し替えたのに、ポチョムとの出会いを大げさに話し出したノエル。この娘は母に自分の失敗が知られてしまうことに、全く気がつかなかつた。

「ええー！ ポチョムくんだって舐めてたもん！ 私のせいだけじやないもん！」

「干し芋も、贅沢だつたかしら？」

「あはは、お母さん。作り笑いこわーい。干し芋サイコー……」

「いや。ノエル殿も、マリー殿も、ワシの為に……」

「いいのよ。ポチョムさん。今一番栄養が必要なのは、あなたよ」自身はライ麦のパンを手に取つてマリーが笑う。作り笑いとは正反対の優しい笑みだ。

「そうだポチョムくん、遠慮するな！ 一口舐めて『もうお腹いっぺい』って言えばいいんだ！」

「ノエル！」

「ウヒヤツ！ 干し芋、ウツマーツ！ 最高！ 絶品！」

「…………かたじけない…………」

ポチョムは込み上げてくるものを『まかそつとしてか、慌ててシチューに首を突つ込んだ。

「でも、お母さん。アムールタイガーってさ

「何？ ノエル」

「猫舌じやないのかな？」

「あつ？」

「アツーツ！」

ポチョムが舌を腫らしながら、シチューから顔を上げた。

「……」

結局冷めるのを待つ気まずい時間に耐えられず、シチューは三人で分けて食べた。

## 一、フランソワ・ノエル・バブーフ<sup>6</sup>

冬の帝国は手詰まりになつていった。

この帝国は北半球の大陸北部にあり、南部の良好な港に恵まれていない。

海の多くが北極圏に属し、使いでのいい不凍港がなかつた。他の国が港から植民地を目指す時代に取り残され、ならばと陸地をひたすら東に進み、国土を拡げた。

だがその広い国土が仇となる。大き過ぎたのだ。国境線は伸び、国内の異民族は増えた。その結果、どちらも自国の支配下に置く為に、身の丈以上の軍事力が必要となつた。

東への国土拡張を進めた結果衝突した『日の帝国』。

東方の小国と侮つていた、その日の帝国との戦いにも破れた。帝国は一気に疲弊した。

この弱体化を好機ととらえ、国内に潜伏した社会意義者達が活動を活発化していった。

歴代の魔法皇帝も、手をこまねいていた訳ではない。農奴を解放し、鉄道を敷き詰め、地方議会を認め、富国化を急いだ。

だがむしろタガが弛んだ時にこそ、人々の不満は表に出やすい。各地でデモや反乱騒ぎを聞く日々が続いた。

そして時代は、冬の帝国に更なる消耗を強いた。

『鉄の帝国』とその同盟国『音の帝国』との戦争だ。後に『第一次魔界大戦』と呼ばれるこの戦いは、世界初の総力戦だつたと言われている。戦争に、国の全てを費やす戦いだつた。冬の帝国は確実に、消耗していった。

「あははははっ！ 風花！ おっはよー！」

ノエルは学校に登校するや、廊下で見つけた友人の背中に飛びつ

いた。

「ビックリするつて！ ノエル！」

ノエルの襲撃に驚いて、背の高い巻き毛の少女くどいが自分の肩を振り返る。ノエルの友達で貧しい鉄工所の娘工藤・リヤ・風花だ。工藤・リヤ・風花だ。友達からは風花と呼ばれている。

「聞いてよ、風花！」

「何だよ？ 聞くから離せよ！」

風花は朝の学校の廊下で突然背中に飛びついだ友達を、振り回しながら応える。

「えへへ、聞いて驚きなさい、風花！ 実は猫を ん？」

「どうした？」

「リツキーの奴、またいじめられてる」

ノエルは風花の背中から降りた。その視線の先に、同級生に頭を小突かれている気弱そうな少年がいた。分厚い本を抱え、己の身よりはその本を守つて叩かれるがままになつている。

「リツキー？ 郷じゅうリツキーか？」

「うん。ちょっと助けてくる」

「おい、ノエル！ ちょっと！ たく…… 相変わらずだな」

ノエルが正義感に肩を怒らせて、人だかりができ始めていたいじめの現場に突入していった。

その友人を、風花は慌てて追いかけた。

ノエルはその容姿から人目を引く。いじめの現場に乗り込んでいくつては尚更目立つ。歩くだけで集めた視線を、ノエルは騒動の現場までまとめて引っ張つていった。

「止めなさい！」

凛とした声でノエルは、いじめの前に仁王立ちする。追いついた風花を初め、取り巻いた生徒の視線がノエルに一斉に集まつた。

「またお前か、フランソワーズ！」

一際強くリツキーを小突いていた男子が、苛立たしげに片目を細めてノエルに振り向く。

「フランソワ。いいからリックキーを離しなさい！ よつてたかつて、恥ずかしくないの？」

「ああん？ こいつ本ばっか読んでっからな、体使った遊びを教えてやつてただけだって！ 邪魔すんな！」

そう言つてその男子は、見せつけるよにリックキーのお尻を蹴り上げた。

「 ッ！」

「 なつ！ 止めな 」

リックキーが声に鳴らない悲鳴を上げ、ノエルが怒りに任せて一步前に出ようとしたその時、

「 お止めなさい！」

そのノエル以上に凜とした声が、廊下中に響き渡つた。

## 一、フランソワ・ノエル・バブーフ

大きく可憐な瞳を輝かせ、一人の少女が人垣をかき分けて現れた。豪奢な金髪をたたえたその少女は、ノエルから周囲の注目を根こそぎ奪い取る。

凛とした聲音によく似合ひ、これまた凛とした立ち姿の少女だ。簡素だが上品な生地の服を身にまとい、一目でブルジョワ階級の娘だと分かる。

よく櫛が通つていてと思しきまぶしいぐらいの金髪が、ふんわりと膨らむように肩から腰にかけて流れていた。そして何より自信に満ち溢れた、輝くような笑みを浮かべている。

肌は白い。肌理が細かい。そして言つなれば、生活に汚れていない。

意思の強さを表すかのように固く結ばれた唇は、吸い込まれそうな赤を皆に見せつける。

「ブルジョワ……」

ノエルはその姿に思わず呟く。何かとやり合つて、隣のクラスの生徒だったからだ。

「てめえは……アナスタシア……」

「あら、アニーって呼んでよ。クラスメートでしょ」

苦々しげに呟く男子生徒に、アニーと名乗った女子生徒は澄まして応える。

「うるせえ！ ブルジョワ階級が、俺らの学校でデカイ顔すんな！」「上品な服着やがつて！ 嫌みなんだよ！ のされたいか？ ああん！」

「そうよ！ デカイ顔しないでよ！ 引っ込んでなさいよ！」

「ノエル！ お前までいじめの仲間みたいだぞ！」

風花はハラハラしながら、ノエルとアニーを交互に見る。

「ノエル？ あら、ノエルじゃない？ いたの？」

「いたわよ！ むしろ先約よ！ てか、今気づいたのね！ 腹立つわ、あんたはいつもいつも！」

「あらそう。でもそのいじめてる男子は、私のクラスの生徒なの。邪魔しないでくれる？」

「いじめられてる男子は、私のクラスの生徒よ。ブルジョワさんこそ、引っ込んでなさいよ」

「私はブルジョワさんじやないわ。アニーよ」

「あらそうだつた？ 心証が薄いから、いちいち覚えてられないわ。ご免あそばせ。おほほ」

「ええそうよ。言われる度に、そう言つているわ。記憶力のない娘ね、ノエルは。うふふ」

ノエルとアニーは、周囲の田を釘づけにしながら笑みを向け合つ。いじめの相手すら忘れてしまったかのように、不敵にわざとらしく合わせ鏡のような笑みだ。

「おいおいどうでもいいけどよー 僕らの相手は、どっちがしてくれんだ？ ああん！」

「そうだ。呼びかけておいて、ガン無視とはい一度胸じゃん リックキーを放り出すように突き飛ばすと、一際体格のいい男子が

二人、ノエルとアニーの前に進み出ってきた。苛立たしげに目を細め、自分達の楽しみを邪魔した女子一人を睨みつける。

「調子に乗んなよ！ ブルジョワ！」

そう叫んで掴みかかってくる一方の男子を、アニーは力ではなく技で迎え撃つ。

軽やかに身を翻して横に避けると、同時に相手の手首を掴んでいた。相手の手首の親指のつけ根辺りに、自分の親指を当てる。アニーはそのまま何げない風に捻り上げた。

「アニーよ。何度も言わせないで」

「イテテテッ！」

痛点を極められたその男子は、痛みから逃れようと身を捩る。だがそれはアニーの思惑通りだった。気がつけば男子は、腕を取

られたままアニーに背中に回かれている。もう一度アニーが軽く力を入れると、男子は肘を曲げられ後ろ手に手を取られていった。

「やるじゃない……」

その鮮やかな手並みにノエルが思わず笑くと、その声が聞こえたのか、

「ふふん」

アニーが自慢げに鼻を鳴らした。

「余所見してんじゃねえよ！ フランソワーズちゃんよ！」

「フランソワよ！」

殴りかかってきたもう一方の男子を、ノエルは魔力で迎え撃つ。ノエルが左手を軽く振り上げた。左手は魔術を使う上で有利な腕だ。

実際に軽やかにふるわれたその左手の魔力で、その男子は力強く足を払われた。

「 ッ！」

男子は声も出せずに空中で半回転する。見えたのは天井だ。

ノエルが挙げていた左手を振り下ろした。男子は今度は上から魔力で叩きつけられた。

床に背中から激突する

誰もがそう思つた瞬間、ノエルは更に左手をふるつ。

「ひ……」

男子は床に叩きつけられる寸前で、やはり魔力のクッショーンにその身を支えられた。しばし間を置いてその力が消え、男子はぼとりと床に落ちた。

「一↑上がりね」

ノエルが上機嫌で振り向くと、アニーが目を白黒させていた。

「やり過ぎじゃない？」

茫然自失で床に転がる男子に目をやりながら、アニーが呆れたよう言つ。

「ふふん！」

ノエルは先程のアーティーに対抗したのか、殊更強く鼻を鳴らした。

## 一、フランソワ・ノエル・バブーフ⑧

ノエルが男子生徒を文字通り叩きのめしていた丁度その頃、ポチヨムとマリーは畠に出ていた。ノエルは朝の用事を手伝うと、元気にして学校に出ていった。朝起きて、出かけるまでもひと騒動だった。

「いい娘ですね。ノエル殿は」

ポチヨムは出かけるまでのノエルを思い出す。

肘打で起こされると、朝からヒゲに両手でぶら下がられた。タオル代わりに毛皮で顔を拭かれるや、凍える手は容赦なく脇の下に突っ込まれた。

尻尾の固結びチャレンジは、さすがにマリーが止めさせた。だがマリーが見ていないところで、ちゃっかりヒゲを一本結ばれてしまつた。

「なかなかああは、素直に育ちませんぞ」

ヒゲはマリーにほどいてもらつた。それでも少々癖がついてしまつたそのヒゲを、ポチヨムが楽しげに揺らす。

ポチヨムは今、畠を耕す手伝いをしている。もちろん前足に鋤や鍬を持って、耕している訳ではない。随分と昔に手放した農耕馬用の、農耕器具を納屋から引っ張り出してきたのだ。

農耕馬用のプラウ　スキだ。鋭い杭状の木が何本かついた器具が、畠の固い土を次々と耕す。本来馬が牽引する為の繩がついており、その先はポチヨムにくくりつけられていた。

農耕馬が引っ張る代わりにポチヨムが引っ張り、マリーが乗つて体重をかけることで畠を耕していった。生活の為に馬を手放してからは、久しくしてない作業だ。人力よりも随分と早く、楽に畠が耕せる。

「どうにも、お恥ずかしいことに、周りに合わすということを知らない娘で……」

「いやいや。ワシのような素性の知れない者に、なかなかああは接

せられませんですぞ」

「本人は前から猫を飼いたって言つてましたから、多分のその代わりだと思いますよ」

「がはは。随分と大きな猫ですね」

ポチヨムは豪快に笑つた。昨日まで死を覚悟していた自分が、もう腹の底から笑つている。昨日のあの死すら覚悟した思いが、嘘のように晴れ上がっている。そしてポチヨムには、それがおかしいことに思えない。

「ははは。頭もいいし、見たところ魔力もかなりあるご様子。将来が楽しみではないですか？」

ポチヨムは上機嫌で続ける。畑で泥に塗れて働くことが、こんなに楽しいことは知らなかつた。

蹄のないポチヨムは、少々よろめきながら畑を進む。だかそんなことすら、この魔獣には嬉しい。一步一步歩く度に、確実に畑が耕されていくのが分かる。

壊すこと、殺すことしか鍛錬しなかつた、軍属時代が幻のように思える。

「今の時代、ただ魔力が強くてもですね……」

「何かお困りでも？」

「この畑……どう思います？ ポチヨムさん」

「失礼を承知で言わせていただければ…… 随分と瘦せた土地でいらっしゃる……」

「そうなんですよ…… 本当はいい土地なんんですけど、隣の畑の地主が嫌な人でしてね…… 魔法で人の畑の養分を持つていつてしまふんです……」

「何ですよ。ですが、お一人とも魔力はお強いご様子。それでも防ぎ切れないものなのですか？」

軍属として育てられたポチヨムには、畑仕事の苦労が分からぬ。だがこの魔法世界。魔法の力が強い者は、各方面で有利なはずだ。そして一人の魔力はポチヨムをして、感心させられた程だった。

「魔力が強いのはノエルだけですよ。私はからきしで……あの娘には学校にいって欲しいし、どんなに頑張つたって、畑につきつりという訳にはいかないですし……向こうは金に物を言わせて、人を雇つてまでちょっかい出しますしね……こっちの地主はお金があつても、魔力が弱くてね、見て見ぬ振りですよ……。そのくせ小作料だけはしつかり持つていきますし……でもね、ノエルの魔力は本当に凄いんですよ。ノエルなら一人でも向こうの地主と渡り合えるんでしょうけど、やっぱり娘の身では心配でしてね……耐えさせてるんです……」

「そうでしたか……」

ポチヨムはマリーの言葉に、反乱の同志を思い出す。

反乱に加わったのは、皆貧しい階層の出の者だ。一度貧困層に落ちると、なかなか這い上がれない。富める者は富み、貧しい者は貧しいままだ。金にあかせて、他人の物を奪う者までいれば、それは尚更だ。

「魔力が強いのは、ノエル殿だけでしたか……では昨日ワシを運んだのは

「ノエル殿一人の力か

と、ポチヨムは後に続く言葉を内に呑み込んだ。口に出して言つには、少々信じられない。そう感じたからだ。

十四、五歳の少女に、普通そんな力などない。それは口に出して言えば、我ながら嘘のように感じられる程の力だった。

## 一、フランソワ・ノエル・バブーフ⑨

アニーが廊下の向こうに、いじめの相手をふわりと突き放した。

「まだやる気？」

怪我をさせないように手加減して相手を解放したアニー。言葉だけはきつく、こちらも突き放すようにそう言つた。次は手加減しない。意外にそうとも言いたげな厳しい口調だ。

「優等生気取りやがつて…」

「覚えてやがれ！」

男子生徒は口々に吐き捨てるど、他の仲間と廊下の向こうに消えていく。

リックキーがそれでも怯えるように身を屈めて、慌ててノエル達の下に走ってきた。

「ほん！ いつでも相手になるわよ！ クラスの平穏は私が守るわ！ リックキー大丈夫？」

ノエルが呼びかけると、リックキーははにかむように黙つて何度も頷いた。

「いつでも言いなさいよ。私がとつちめてやるんだから」「まるで護民官 グラキュース気取りね、ノエル」

アニーは意氣揚々と胸を張るノエルに、呆れたようにこう言つ。グラキュース それは古代『古の共和国』で、市民の為に戦い死んでいった兄弟官吏の名前だ。

「そうよ、私はさしづめグラキュースね。グラキュース・バブーフよ。そう呼んでくれていいわ」

「そう、グラキュース兄弟気取りもいいけれど、あまりやり過ぎないことね」

アニーはそうとだけ言つと、何事もなかつたかのように人垣をかき分け去つていく。

「……」

リックキーが礼を言つ暇もなかつた。アニーは皆の視線を背中に受けて、悠々と歩いていく。

「何よ、あのブルジョワ？ お高く止まつちやつて」

「アニーはいい奴だつて。ブルジョワなのに、庶民の学校にわざわざ通つてんだぜ」

風花が慌ててノエルの横にやつてくる。その隣でリックキーが、やはり無言で何度も頷いた。

「はあ？ ただの嫌みじやない。何の為にそんなことすんのよ？」

「そう突つかかんよ。アニーの奴、あの上品さだろ？ 下々の暮らしを知る為に、あえて田舎の学校を選んだ貴族様 そんな噂すらあるぜ、アニーには」

「貴族がこんな町外れの学校に、くる訳ないじやない。ちょっと美人で、成績がいいからつて、皆持ち上げ過ぎなのよ。夢見過ぎなによ」

「でもアニーの奴、ノエルより頭いいもんな。ビックリだよ」

風花が心底感心したように言い、リックキーがこれまたやはり黙つて何度も頷いた。

「なーつ！ 私別に負けてないわよ！」

「この間の試験では、アニーが一番で、ノエルが二番だったじゃないか」

「たまたまよ！ たまたま！ いつも私が一番じゃないわ！ 私が一番の時だつてあるもの！」

「それにもノエルとはいつも、一番を半々で分け合つてるよな。やつぱアニーも頭いいわ」

「キーッ！ 腹立つ！ あいつ大嫌い！ べえつだ！」

ノエルはもはや見えなくなつたアニーの背中に、思い切り舌を出して見送つた。

昼前。ポチヨムは畠仕事に精を出していた。仕事に集中すればす

る程、ポチョムとマリーは無口になつてゐる。

ポチョムは口数が減る度に更に集中し、その中でどうでもノエルの魔力のことを考えてしまつていた。

「マリー殿。ノエル殿は

何故それほどの魔力を？ とポチョムが思い切つて訊こうとしたその時、マリーが口元に人差し指を持つていつた。静かに。そう無言で促している。

「あの娘の父親 クロードは『華の共和国』の出でしてね……」

「華の共和国といふと…… 市民革命があつたあの……」

市民革命の話はここ、冬の帝国では御法度だ。華の共和国の革命を、この冬の帝国でも再現すべしという意見を、政府は恐れ弾圧している。

ポチョム自身も反乱には立ち上がつたが、市民すら犠牲にしてよいと考える過激な革命論者には、正直言つて眉をひそめている。そう、革命論者が過激になる分、政府の弾圧も過剰になる。マリーが声を潜めたのは命の為だ。

「そうです…… 色々な国を転々と渡り歩いたらしくって…… マリア・テレンなどとかいうお姫様にも、仕えたことがあるらしいですよ…… 少佐にまでなったとか、言つてました……」

「マリア・テレ…… もしや音の帝国では？ 少佐とは…… 涙いですぞ」

「そなんですか？ 私はあまり詳しくないんですけど…… ポーぜフ何世だかは、自分が育てた とか、よくホラは吹いてましたけどね。あの子の名前も、華の共和国の隠れた英雄の名前からとつたそうですよ。独裁がどうの、コミコンがどうのと言つ出した人の名前ですね。でも男の人の名前なんですよ。何もそのままとることもないでしょにね」

「やはり男の人の名前でしたか。ですが、コミコンとは何ですかな？」

「まあ？ 私にはさっぱりです。ノエルは街の図書館で、色々調べ

たみたいですけど。『ミニミニケーション』がどうとか、いろいろ言つてましたけど。私には難しくつて……」

「そうですか。ではノエル殿の魔力の強さは、そのお父上 譲りと言いかけた時、当の本人が帰ってきた。

「たつ！ だいつ！ ま一つ！」

「グオツ！」

当の本人の足の裏が、ポチョムの脇腹を襲つた。

「ガハ……」

ポチョムが声にならない声を上げる。不意打ちな上に、脇腹にもろに入つた。どうにもノエルはこの蹴り方が好きらしい。

「これ！ ノエル！」

マリーが思わず声を上げる。よりもよつてあんな一番弱そうな所を、全く無警戒な時に、全体重を込めた飛び蹴りとは。育て方を間違つたかと、思わず天を仰ぎたくなつてしまつ。

「働いとるかね！ ポチョムくん！」

「み……見ての通り……ですか……」

「ポ、ポチョムさん……大丈夫ですか？」

「どれどれ……凄い！ これ全部一人で耕したの？ いつもなら三日はかかるよ……」

「喜んでもらえて……何より、ですな グフツ！」

ポチョムはそれだけ言つと、痛みに耐えかねて四肢を屈した。

# 一、フランソワ・ノエル・バブーフ10

昼の休息を挟んで、今度は三人で一日中畑を耕した。最後にポチヨムに手伝つてもらつて、崩れかけていたあぜ道の修繕もした。気になつていてが、今まで手が回らなかつたのだ。

ノエルが鎌 ハンマーをふるつて土止めの板を打ちつけ直し、ポチヨムが土を踏み固めた。

「ムツ？」

「どうしました？ ノエル殿？」

「緩くなつてゐる」

「ガタがきてますな」

「どれもこれも、ボロボロよ。鎌もそうなのよ」

ノエルは続いて軽く念じ、古びた草刈り鎌を虚空より魔力で呼び出した。

片手用の鎌だ。木の柄に大きく曲がつた三日月状の刃がついている。麦類を刈るのに便利なように、搔き寄せる為の湾曲した刃を持つ鎌だ。

「鎌も鎌も古いのよね。仕方ないか」

ノエルがもう一度念じると、鎌と鎌は光を放つて虚空に消えた。「でも随分とはかどつたわ。これなら、いい秋時き小麦が穫れそうね」

深く柔らかく耕すことができた畑を見渡して、マリーが一息ついた。本格的に雪が降り積もる季節の前に、種蒔きができるそうだ。マリーは心底ほつとしたように、肩から力を抜く。

「……ポチヨムくん……」

ノエルが母に見えない角度で、ポチヨムのヒゲを引つぱつた。小声でポチヨムの名を呼ぶ。

「ノエル殿…… ヒゲはそのように使う為に生えている訳では……」

ポチョムは引かれるがままに、ノエルに顔を寄せた。ノエルの端正な顔が、ポチョムの耳に寄せられる。やはり小声で囁きかける。

「お願いがあるの……」

「何ですかな?」「

「お母さん! ポチョムくんと散歩にいってくる!」

ノエルはそう叫ぶや否や、駆け出した。ポチョムが慌てて、後ろを追いかける。

「暗くなる前に帰つてくるんだよ!」

あつという間に小さくなるノエルの背中に向かって、マリーが心配げに声をかけた。

「ノエル殿…… 何処へ?」

ポチョムがノエルの背中に訊いた。散歩と言ひ割には、えらく駆け足だ。だが四足歩行のポチョムから見れば、むしろ合わせにくらい速度だつた。追い抜かない程度に歩幅を合わせる。

「隣の土地の地主のところよ」

「ノエル殿…… それは……」「

ポチョムは毎前のマリーとの会話を想い出す。自分とこゝ加勢を得て、地主に仕返しにいくつもりなら止めなくてはならない。

ポチョムはいつまでも、ここに居られるとは思つていない。何より娘の身を案じて耐えている、母の気遣いが無駄になる。

「ちょっと脅かすだけだよ。ポチョムくんの姿を見せてやれば、誰だってビックリするもの!」

「しかし……」

「大丈夫だつて! 大地主のくせに、気が小さいのよ、あいつ。ポチョムくんの姿を見たら、震え上がつて家から出でこなくなるわ」「ですが……」

ポチョムの表情が曇る。「いやノエルに怪我でもさせてしまふ」に申し訳が立たない。

「近づけなきや、悪さもできないでしょ? 家を留守にするといつもお母さんが心配なのよね

「ノエル殿……」

ポチョムはジッと、駆けるノエルの背中を見つめる。どんなで時も、お互いを気遣う親子なのだろう。魔獣の胸を、何か熱いものが込み上げる。

ポチョムは沸き立つ思いのままに四肢に力を入れ、一息にノエルの前に出た。

「ノエル殿！ 背中へ！」

ポチョムが叫ぶ。

待つてましたと言わんばかりに、ノエルがその背中に飛び乗った。ポチョムは一気に加速する。ノエルに合わせていた時とは比べ物にならない、野生動物の走りだった。

「凄い！」

「まだまだ！」

ポチョムは己の四肢に魔力を込めた。野生動物を超越した、魔法のマスクット猛獣としての、真の力を解放する。溢れ出る思いのままにポチョムは雪道を駆けた。

その速さ故にたなびく髪を流れるがままにして、ノエルは風をポチョムの力を全身で感じる。

「凄い！ 凄い！ 速い！ 速い！」

ノエルは大興奮だ。

「さすが！ ポチョムくん」

「ははっ！」

ポチョムが笑って、更に加速する。この少女の期待に応えることが、誇らしくて仕方がない。

「百獣の王！」

「それ！ 違つ」

ポチョムはカーブを一つ曲がり切れず、雪山に突っ込んだ。

# 一、フランソワ・ノエル・バブーフ11

「陛下。国内の反乱分子は未だ、掃討し切れていません。鉄の帝国との戦線も、芳しくはありません」

魔法皇帝直属の僧侶は、皆の意見を皇帝に伝える為に、冬の帝国皇帝ニコライ一世に謁見していた。この帝国の魔力と国力の象徴である皇帝は、敬意を持つてこう呼ばれている。

マジカル・ツアーリ 魔法皇帝 と。

「そうか……」

皇帝は咳くように応えた。

国内の反乱は後を絶たない。やむなく参戦した魔界大戦も、戦果は芳しくない。当初は祖国防衛の愛国心が、反乱分子を押さえ込む役割を果たしていた。

国内はまとまり、外敵は排除され、国民は高揚感に酔い、生活の苦しみを一時的にでも忘れることができる。それが今まで戦いだつた。今回もその効果を期待していた。

だが今回の魔界大戦は、今までの国家間の戦いとは、全てが違つていた。今までの戦いは、言わば会場だけの戦いだった。代表が出ていき戦う。そんな感じだ。

後に第一次魔界大戦と呼ばれるようになる今回の戦いは違う。総力戦とでも言つべき状況になり、国のが戦いにつぎ込まれた。戦費。兵士。食料 そしてもちろん魔力。全てが国全体を圧迫した。

そのツケは国民に向かつた。特に貧困層は、その最たるものだ。

「国内に残る革命論者……………」 杉ケレンは言うに及ばず、亡命中の川人レナや、瀬月レオン。流刑中の星リンも含めて早めに処分せねば、他の民衆も反乱に手を貸しかねません。そうなればもはや反乱ではありません

「…………」

皇帝の顔は苦惱に歪む。

「革命です」

皇帝直属の僧侶は、私情を込めずにそりやかに言った。

ポチョムは自分の甘さを呪つた。ノエルが自制するなど、まず無理だったのだ。

「あはは！」

ノエルはポチョムにまたがつたまま、隣の土地の地主の屋敷に雪崩れ込ませた。

「ノ、ノエル殿！」

「いいのよ、ポチョムくん！　このまま馬小屋から回つて…」

「し、しかし……」

「近所の子供が、飼い猫連れて遊びにきただけ。何もおかしなことなんかないわ。ポチョムくんは、猫の振りね！」

「そ、それは……」

「返事が違うわ、ポチョムくん！　今のポチョムくんは猫よ！　返事は、ニヤーッよ！」

「ニヤ？　ニヤーですか？」

迫りくる魔獸の匂いと気配に、小屋の馬達が驚きいなかった。敷地に放されている犬達も、遠巻きに吠えかかってくる。

馬と犬の声に驚かされた鶏の、悲鳴にも似た鳴き声が、ノエルの家の畠よりも広い敷地に響き渡る。ポチョムと敷地を一周すると、屋敷の前でノエルはその背中から降りた。

「何だ？」

家畜の声に驚き、最後に声を上げたのは屋敷の用心棒だった。

用心棒は手に櫻の木の棒切れを持ちながら、慌てて屋敷から飛び出してきた。昔は筋肉質だったであろう小太りの中年男性が、押つ取り刀で駆け寄つてくる。

「てめえ！　バブーフの小娘！　何しに！」

だが用心棒はそこで息を呑んでしまつ。その小娘の背後にいるのは、大きな虎だつたからだ。

「こんにちは。セルゲイ。地主さんはお元氣?..」

「何だ……と、虎?..」

「いやね、猫よ。今度家で飼つことにしたから、『迷惑かけないよ』といへ挨拶にきたの」

「ニヤ……ニヤ……」

ポチョムが、きこちなく鳴いてみせた。

「可愛いでしょ?..」

「何処がだ! どう見ても、虎じゃねえか! 脅しか? 日頃の意趣返しか?..」

「あら、ご挨拶よ。言つてゐるじゃない? 地主さんは、お屋敷の中? お邪魔していい?..」

ノエルは歩き出し、セルゲイと呼んだ用心棒の横をポチョムとともに通り過ぎる。その様子はまるで無警戒だつた。

「く……お前にする挨拶は これだ!..」

セルゲイは振り返り、出し抜けにノエルの背中に棒切れを振りかざした。

なつちゃいないですな

そう呆れながら、ポチョムが首だけ振り向く。セルゲイの腰の入つていないので動きに拍子抜けした。軍隊に入つたら、ポチョムが一から鍛え直すところだろう。

それでもノエルを危険にさらす訳にはいかず、ポチョムは魔法の障壁を開けようとした。

「はい!..」

だがポチョムよりも先に、魔力を放つたのはノエルの方だつた。体を軽やかに翻し、左手を内から外へと振る。何もなかつた左手に握られていたのは、先ほど古いと言つた草刈り鎌だ。

そのノエルの一振りに、セルゲイの得物はあっさりと弾かれた。

「がつ! この……」

「ふふん」

ノエルが鼻で笑う。無理もない。鎌は触れてもいいのだ。

鎌から放つた魔力が、振り上げていたセルゲイの棒切れを弾いていた。ノエルが後から動いたにもかかわらず、この用心棒は振り下ろすことすらできなかつた。

「小娘が！」

「小娘つて失礼ね！ ちゃんと大きくなつてるわよ」

「あん……」

セルゲイは一度視線を下に向け、

「ははっ！」

ノエルの胸辺りで鼻を鳴らして顔を上げた。

「失礼な！ ポチョムくん、下がつていって！」

ノエルは更に念じる。今度は右手に鎌が現れた。

ポチョムは言われるがままに、後ろに一歩二歩と下がる。そこは気がつけば玄関前だつた。

二人の実力の差は一目瞭然だ。ここからでも十分、何かあつても対処できるだろう。

「食らいな！ 小娘！」

セルゲイが得物を振り下ろした。一撃目を軽くあしらわれたせいか、先ほどより力の入った唸りが空気をつんざく。

その棒切れを受け止めたのは、やはりノエルの左手の鎌だ。

そのままスパツと切れるところをノエルは想像したが、もちろんただの鎌にそこまでの切れ味はない。ならばとノエルは鎌を払い、セルゲイを押し戻した。

ノエルは地面を蹴つた。セルゲイからすれば、大地を滑るように飛んできたかのように、見えたかもしれない。相手の懐に難なく侵入したノエルは、そのまま右手の鎌を軽く突き出す。

「が……」

顎を強打したセルゲイが、目から火花を散らしてのけぞつた。

そのまま押し込めば、ノエルの勝ちは決まつていただろう。

だがもう少し懲らしめてやりたい。仕返しにこないようには、実力差を分からせてやりたい。ノエルはそう思つてか、手を止め身構え直す。

ポチヨムのいる今なら、相手をやり込めておけば、おいそれと手出しへきなくなるだろう。ノエルは完膚なきまでに叩きのめすべく、相手が体勢を整えるのを待つた。

「ぜ……ぜえ……」

「あら？ もう息が上がってるわよ」

ほざけと、言つたらしき息を漏らして、セルゲイが木切れをふるう。

「当たらないわよ！ そんな力任せの攻撃！」

食らえと、動かしたらしき唇の動きを見せながら、セルゲイは闇雲に得物を振り回す。

「そつちこそ、食らいなさい！ 『鎌と鎌の挟撃』！」

ノエルが両手を同時にふるう。外から内へ同時にふるわれた鎌と鎌は、振り回されていたセルゲイの櫻の木の棒切れを挟み込み、木つ端みじんに碎いた。

「な……」

「終りね」

たいしたものですねと、ポチヨムはノエルの一連の動きに感心する。

ポチヨムはノエルの動きを見ていた。ノエルが勝つだろうとは思つていた。だがそれにしてもこれほど無駄なく動き、相手を押さえ込むとは思わなかつた。

「溢れんばかりの魔力に、この身のこなし…… 特別な何かを感じますな……」

ポチヨムは一人頷く。その背後で、

「つるさいぞ、セルゲイ。どうした？」

下腹を見事にたるませた、初老の老人が玄関から現れた。老人は玄関を出たところで、何か柔らかいものにぶつかる。表面はごわご

わとした毛に覆われ、その中身は分厚い筋肉と強固な骨からなる、獸臭いものに視界を遮られた。

「セルゲイ。何だ？ 馬か？ 牛か？ 繋いでおけ

「……」

ポチヨムがゆっくりと振り返った。そのあまりに緩い気配に、警戒することすらしなかった。

見る見ると青ざめる地主らしき人物が、ポチヨムと目が合つて固まっている。田を思い切り丸く見開き、少しでもつつけばその場で倒れそうだ。

「ニヤー……」

ポチヨムがとりあえずそう挨拶をすると、

「 ッ！」

つづく必要もなく地主は背中から倒れていった。

## 一、フランソワ・ノエル・バブーフー2

「あはははっ！ サイコーシー！」

ノエルは腹を抱えて笑った。

隣の土地の地主 増い富農の、驚き青ざめた顔が忘れられない。あんな顔のまま氣絶ができるなどと、ノエルもポチヨムも思つてもみなかつた。

「がはははっ！ これでしばらくな、手を出してこないですか？」  
ポチヨムも快活に笑う。家路の途中だ。

「そりがな？ やつぱもつと徹底的に、怖がらせた方が良かつたかな？」

「はは。やつ過ぎなことですよ」

「いいのよ！ いいのよ！ 独り占めするような奴は、あれぐらいでいい薬よ！」

ノエルは楽しきつて仕方がない。家に帰るまでこの楽しい話題を一人で話し切らないと、母にもしゃべってしまづ。その自信がノエルにはあつた。

「独り占めはよくないですな。がはは」

「そうよ！ 独り占めよくない！ 独裁反対！ あはは！」

「はは。しかし、たいした鎌と鎌捌きでしたな」

「まあね。他に武器らしい武器も手に入らないし、我が身を守るために自然と身についたの」

「ですが確かに、あんな使い方をしていては、傷むのも無理ないですな」

「あはは。滅多にあんな風には、使わないわよ。私だって、普通の女の子だもん」

「がはは。それはどうですか？」

「何を！ あはは！ でもいいわ！ 気分がいいわ！ 学校でのストレスが、吹つ飛んだわ！」

「ストレスですか？」

「そうよ！ 学校に一人、嫌みなブルジヨワがいるのよ。」

「おや、マリー殿の為かと思っていたら、自分の憂を晴らしの為でしたかな？」

「あはは！ いやね、ポチヨムくん！ ストレス発散は、ついでに決まつてゐるじゃない！」

「がはは、そういうことにしておきますかな。そういうつ、それとノエル殿。これを」

ポチヨムが念じると、ノエルの目の前にガラスの小ビンが現れた。細長い円柱のガラスに、旋回式の鉄の蓋がついている。歩く一人の速度に合わせて、目の前で宙に浮いていた。

「何？ ポチヨムくん？」

「薬ですね」

「薬？ ヘー」

「雪山に突っ込んだ時の擦り傷を、治しておいた方がよいですぞ。マリー殿が心配しますからな。劇薬ですので、一口だけ舐めて下され」

「グハッ！」

言われるがままに小ビンに手を伸ばし、一口だけ口をつけたノエルがむせ返る。

「……ゲホッ！ グ…… カハッ！ ……きつっ！」

「ははは。直接傷口に塗つても効きますが、やはりグイツとこくのが一番。まあノエル殿には、まだ早かつたですか」

「ゲホッ…… 何これ？ 傷が見る見る治つていくんだけど？」

ノエルの擦り傷が、瞬く間に塞がっていく。跡すら残らない。ノエルは疲れすら、吹き飛ぶように感じた。

「超タウリン。ワシの名前ゆかりの魔法の薬ですね。ワシはタウリンが超スキーでしてな」

「でも、一口でも…… きついわよ…… これ…… ケホ！」

「強過ぎる薬は劇薬。毒ですからな」

ノエルの傷が癒えたのを確認すると、ポチョムは目を細めて笑う。  
続いて軽く念じると、ガラスの小ビンが虚空に消えた。

「お灸も薬だもんね」

お灸をすえてやつた悪徳地主の、青ざめた顔がまたもやノエルの  
脳裏に浮かぶ。

「あはは！」

「がはは！」

一人でたんまりと、その後も悪徳地主の青ざめた顔を笑い者にして、家に帰った。

# 一、フランソワ・ノエル・バブーフー3

「ただいま！」

「おかえり」

ノエルとポチョムが家に帰り着くと、マリーが腕によりをかけてご馳走を用意していた。

久しぶりの贅沢だ。何日もかかると思った畠仕事が、あつという間に終わつたのだ。ポチョムへの礼も兼ねて、これぐらい贅沢しても罰は当たらないとマリーは思ったのだろう。

ボルシチに、ピロシキ、その他数種類のパン類。滅多に並ばない肉もあれば、盛りつけられた野菜はとても色とりどりだ。

「マリー殿…… これは……」

ポチョムはその料理の数々に、目を見張る。客人に最上級のおもてなしをするのが、冬の帝国人気質とはいえ、これではあまりに贅沢だ。巨躯を誇るポチョムでも、そう思つてしまつ。

沢山の料理が、ポチョムの為に床に置かれてゐる。マリーは自分達の分も、床に置き始めた。ポチョムに合わせて、床で食事をしようというのだ。

「いいんですよ。今日だけ。ね」

「そうだぞポチョムくん！ ポチョムくんは立派な労働力だ！ 農耕虎だ！ 遠慮するな！ その代わり、明日から血反吐いても、また働いてもらつからな！」

「これ！ ノエル！」

「ウヘツ！ そうだポチョムくん。何かお話してよ。魔法のマスクツト猛獸でしょ？ 色々戦つてきたんでしょ？」

「あ、いや……」

ポチョムは黙つてしまつ。祖国の為に、戦つ力をつけた。だが最後に本当に力を發揮したのは、その祖国に牙を剥ける為だった。自らの名がついた戦艦で、ポチョムはあまりに貧しい兵士達の為に立

ち上がつたのだ。

「ん、どうしたの？ ポチョムくん」

「いや、ワシは……」

魔法皇帝はポチョムを貴族にしてくれた。その大恩ある人物に、自分は歯向かつたのだ。

今でも後悔はしていない。あの悲惨な兵士達を見て、そしてその後ろにいるであらう、更に悲惨な家族を思えば、声を上げずにはいられない。

「ワシの戦いは……」

艦隊を監督する提督に、まずは兵士の待遇改善を求めた。話し合いで済ませるつもりだった。しかし所詮は獸　いや魔物と侮られ、提督は意に介さなかつた。

話し合いが長引くうちに、兵士達の我慢が限界に達し、暴動が始まった。

ポチョムは暴動を煽動したとされ、その場で取り押さえられた。次々と打ち倒されていく兵士達。ポチョムは気がつけば提督に傷を負わせ、兵士達の下に駆け寄り、反乱分子の一人　いや先導者になつてしまつていた。

「いいのよ。ポチョムさん……　言いたくないのなら……」

「どうして？　ポチョムくんの活躍！　私、聞きたい！」

「ノエル！」

「ハツ、ハイツ」

ノエルは母の滅多に見せないあまりの剣幕に気圧されて、珍しく素直に従つた。

ポチョムがバブーフ家にきて、数ヶ月が過ぎた。

ポチョムはすぐにでもバブーフ家を去るつもりだった。

だがノエルもマリーも、ポチョムに温かく接してくれる。居心地がいい。手が回らないのか、追つ手が迫つてくる気配もない。

いつしか当たり前のように、ポチョムはノエルの家に住むことになっていた。今は労働力をこの家族に提供できる自分が、ポチョムは誇らしくて仕方がない。

ポチョムは労働力だ、農耕虎だ、何だと言わながら、ノエルとともに畠仕事に精を出す。

「あはは！ ポチョムくん凄い！ これ、ポチョムくんだよね？」  
そして年も押し迫ったノエルの誕生日 クリスマスイブ。ポチョムはノエルにプレゼントを用意した。

入れ子構造になつた虎の人形だ。人形の中に入つているマトリヨーシカと呼ばれるおもちゃで、ポチョムが見よう見ま似で、魔力で虎の形を作り出したものだつた。

「ポチョムくん、ちつちや！ でも本当にこの大きさなら、膝に乗せて上げられるのに！」

ノエルが興奮に鼻を膨らませて、一番小さな虎をその大きさ故に摘まむように持ち上げる。

「がはは。そのサイズでは、農作業ができませんぞ」

「あはは、そうね。穀潰しあはははははははは！」

「追い出されますかな？」

「容赦なく追い出されるわよ！ たとえポチョムくんといえども…」

「これノエル！」

「あはは！」

「がはは！」

マリーが声を荒らげるが、ノエルとポチョムは構わずお腹の底から笑い声を上げる。

「でもまだまだね！ ポチョムくん！」

「何がですかな？」

「貧農の我が家では、おもちゃよりも鎌とか鎧のよつうな、実用品の方が喜ばれるのよ！」

「そう言えば、少々痛んでおりましたな。乱暴な使い方をする誰かさんせいで」

ポチョムがいかにも誰のせいか思い出せないと言わんばかりに、わざとらしく小首を傾げた。

「何を？ あはは！ 食らえ！」

ノエルはイスの上に立ち上がり、ポチョムのお腹に足先から飛び込んだ。

「グオツ！ がはは、何の！」

こうしてノエルの小さな家は、大きな笑いに包まれながら新年を迎えるとしていた。

この翌年以降 時代が流血を伴つて大きく動き出すとは、

「あはは！」

「がはは！」

この時ノエルもポチョムも知る由もなかつた。

## 「あははっ！」風花おおっはよ！』

「あははっ！ 風花おおっはよ！』

年のあらたまた一九@へ年一月。今年初めの授業の日。ノエルは学校の廊下で新年早々風花に飛びかかった。

「またか？ ノエル！ 何で人の背中に飛びつくんだよ？」

「風花のこの巻き毛！ 可愛いわ！ 堪らないわ！ 顔を突っ込まずには、いられないわ！」

「あのな！」

「あはは！ もふもふよ！」

振りほどこうとする風花に揺られ、ノエルは狭い廊下で足を振り回す。

「ちょっと、邪魔よ……」

「聞いてよ風花！ クリスマスに誕生日プレゼントももらっちゃった！」

不意に後ろで声がしたが、ノエルは気がつかない。暢気に風花にぶら下がつたままだ。

「プレゼント？ 何を？ 誰に？ そんな余裕あんのかよ」

「あはは！ 何とウチの労働猫からのプレゼント！ この間、会わせてあげたでしょ？」

「あれ、猫かよ…… それに、大きな声で言っちゃダメだろ」

風花はノエルの言葉に、昨年紹介されたノエルの猫を思い出す。家族とともに家に招待され、皆で腰を抜かした。訳ありのようなので黙つているようにと、風花は父 ライカから釘を刺されていた。

「ちょっと、聞いてるの？」

後ろの声は苛立たしげに震えている。完全に無視されていたからだ。

「風花はもう知ってるもの。大丈夫よ、猫だつて話なら

「けどよ……」

「邪魔つて言つてるでしょ！」

「ん？」

その背後の大聲にノエルがやつと振り返る。見るとブルジョワの少女アニーが、そこには苛立たしげに立つていた。

「邪魔よ。何廊下で騒いでんのよ？」

「あらブルジョワさん、おはよつ。お邪魔だつたかしら？」

ノエルは風花の背中から降りて、澄ました顔で振り返る。

「ええそうよ。邪魔つて、言つたのよ。フランソワーズさん」

「フランソワよ」

「私だつて、アニーよ。ブルジョワさんじやないわ」

「ノエルもアニーも、何でそつ念う度に、けんか腰なんだよ？ 仲良くしろよ、お前ら」

間に挟まれた風花が、困惑顔で仲裁しようとする。

「ふん」

だがアニーは鼻を一つ鳴らすと、ノエル達の脇をすり抜けていつた。

「何よ。それにしても不機嫌ね、ブルジョワの奴」

「最近街も、デモやら、ストやらで荒れてるからな。革命がどうの、同志がどうのって、うるさいだろ？ 聞いた話じや、親の反対を押し切つて学校にきてるつてさ、アニーの奴」

「はあ？ なら、無理してこなくていいのに」

「アニーにだけは、本当容赦ないな、ノエルは？」

アニーにだけは冷たくあたるノエルに、風花は肩をすくめて呆れてみせた。

## 一、血の日曜日2

そしてその週の日曜日。

### 惨劇の日

ノエルは久しぶりに、聖教会の日曜礼拝に参加していた。ノエルの通う教会は、首都サンクトペテルブルクにある。町中の厳かな教会だ。母は家の用事で、滅多にこれない。ポチョムはもちらん、町中には入つてこれない。

ノエルは今日、馬車に便乗させてもらい一人で礼拝にきた。

「ガポン司祭様！」

「やあ。フランソワ・ノエル・バブーフ。久しぶりだね」

神の祝福を受ける為、信者が列をなしていた。列の先頭にきた少女が、一際元気な声で司祭の名を呼んだ。

司祭は生え際が、少し後退してしまった頭をかく。久しぶりに見た少女は、少々大人になっていた。その不意打ちに司祭は何だか照れくさくなる。

だがノエルはそのことに気がつかない。

「へへ。お久しぶりです。司祭様」

「半年振りぐらいだね、ノエル。マリーさんは元気かね？」

ガポンと呼ばれた司祭は、それでもノエルの顔を見て、その母まで思い出した。

ノエルは人目を引く。容姿もその振る舞いも、人の氣を惹く不思議な少女だ。誰でも一目見れば、忘れられない。

「元気です。相変わらずうるさいけど」

「はは。ダメだよ。お母さんの言つことは、ちゃんと聞かない」とガポン司祭が、ノエルに祝福を与える。自然に笑みがこぼれる。ノエルと話をしているだけで、自然と笑顔になつてしまつ。本当に不思議な娘だと、司祭は思った。

人があらざる魔法のマスクット猛獸が、司祭と同じ思いを抱いた

ことは、もちろん知る由もない。

「二人分やつて！ 司祭様！」

「これこれ」

「どうしてもこれない友達がいるの！ その子の分！ 形だけでいいから！」

「足でも悪いのかい？」

「足は丈夫ですよ、その子。むしろ人より多いくらい」

「はは。冗談はおよし」

ガポン司祭はそれでも、ノエルにもう一度祝福を「与える。ノエルの頼みを断れない。無邪気な言葉。屈託のない笑顔。裏表のない態度。かけりのない瞳。生きる喜びに赤く染まる頬。

ノエルの全てが、聖職に生きた自分に対する「」褒美のよつに司祭には思えた。

「聖母様……」

司祭は思わず咳く。

そうノエルの笑顔は、まるで聖母が使わした何かの徵<sup>しづ</sup>のように思えててしまう。

いや。もつと正確に言えば

「はい？ 何ですか？ 司祭様」

「はは、何でもないよ…… お友達によろしくね」

「はい。司祭様」

ノエルは一礼すると、列を離れた。司祭が笑顔で見送る。その隙に司祭の横に控えた、別の司祭がガポン司祭に耳打ちをした。

「……分かりました…… この人達に祝福を与えたたら…… 私も参ります……」

ガポン司祭の表情が一瞬だけ陰る。

その陰を振り払うと、司祭は次々と信者に祝福を与える。もちろん笑顔で、心底信者の幸せを祈つて儀式を続けた。だが今の耳打ちに、心の何処かが奪われたままだった。

「数万人規模の抗議行動…… その先導……」

司祭は小さく咳いて、己の使命を噛み締める。

この日の前日。冬の帝国の全土で、政府に対する大規模な抗議行動が行われた。疲弊した経済活動と、それに伴つ弱者へのしづ寄せ。その抗議だ。

そしてガポン司祭は今日、更に市民の窮状を訴える為の、デモ進行の先導することになつていて。その準備が整つたとの連絡だ。

司祭も初めは断つた。だが一人の少女に心を動かされた。

少女は黒髪を頭の両脇でまとめ、優雅に肩に向けて垂らしていた。花売りだという少女は、生活の窮状を訴える。家族の苦しみを切実と訴える。

輝く澄んだ瞳を潤ませて、神と皇帝の慈悲を少女は司祭に乞うた。少女の懇願を受け入れ、ガポン司祭はデモの先導を引き受けた。魔法皇帝は分かつて下さると、司祭は祈るような気持ちで思う。冬の帝国は、革命論者の思惑に乗らない。皆で力を合わし、この困難に立ち向かう。国を二つに割るようなことはならない。司祭は自分にそう言い聞かせる。

だが、命が懸かっていない訳ではない。国は浮き足立つており、人々は色めき立っている。それは市民も、兵士も同じだ。司祭は楽観も、悲觀もするまいと心に誓つた。

祝福に並ぶ信者の列は、終わろうとしていた。あと数人。この信者達に祝福を与えれば、命懸けの抗議に出かける。司祭は我が身が引き締まる思いがした。

信者は残り一人になっていた。大きな男性信者の後ろに、少女のものと思しき長い黒髪が揺れているのが見える。ふと、司祭はノエルのことを思い出した。

先程のノエルの姿に、司祭は聖母の徴を見た。いやもつと正確に言えば、聖母そのものを見た。思わず咳いたのはその為だ。

最後から一番目の男性信者に祝福を与えた後、しばらく目をつむつて祈つてしまつ。

聖母様の祝福もある

何故か司祭には、そう思えた。ノエルの笑顔が自然と目に浮かぶ。あの屈託のない笑顔。聖母の祝福そのものに思えた。

ノエルの笑顔。そして生活の窮状を訴えた少女の輝く澄んだ瞳。ガポン司祭は、ああいう子供達の為に、自分は命を懸けるのだと覚悟を決める。

たとえ二度とあの笑顔に会えなくとも  
司祭がそう覚悟を決めて目を開けると、  
「司祭様！ お母さんの分もお願い！」  
最後尾に並び直していたノエルが、やはり無邪気な顔で微笑んでいた。

## 一、血の日曜日③

ノエルが母の分も祝福を受けて教会を出ると、沢山の市民が教会を取り巻いていた。

ミサはミサ。集会は集会。分けて集まつて欲しい。デモに集まるのは、危険を承知の人間だけ。ガポン司祭の願いだった。

「お嬢ちゃん。ミサはもう終わつたかい？」

「えつ？ あ、はい」

一人の市民の問いかけに、ノエルが戸惑いながら答える。ノエルは何故そのようなことを訊かれるのか、どうしてこれほどの人が集まつているのか分からぬ。皆真剣な顔をしている。

「ノエル……さあ…… お家に帰りなさい……」

ノエルに続いて出てきたガポン司祭が、優しくノエルの肩を抱いた。

「ガポン司祭！」

「司祭様！」

教会の前に集まつた人々が、口々に司祭の名を呼ぶ。

「司祭様…… 皆なんで集まつてるの？」

「ちょっとね…… ノエルは危ないから帰りなさい」

いつになく険しい顔をした司祭が、ノエルの背中を押す。ここにいては巻き込まれる。危険を冒すのは、自分達だけ。そう考えてか司祭は、ノエルを市民の中に優しく押しやつた。

ノエルは戸惑いながら、市民の奥へと歩いていく。周りを固める大人達。皆険しい顔をしている。祈るような顔をしている者もいる。

「何があるんですか？」

ノエルが近くにいる大人の一人に訊いた。初老の男性だ。疲れた目をしていた。

「デモだよ」

「テモ？ テモって、あの抗議に歩くやつですか？」

「そうだよ。皆で皇帝陛下に、現状を訴えにいくんだよ」

別の女性が、ノエルに答える。ノエルの母と同じぐらいの年に見えた。

「現状？」

ノエルが女性に振り向くと、すぐ後ろの男性が叫んだ。

「俺達は苦しい！」

ノエルが驚いてそちらに振り返ると、多くの者がそれに応えるよう叫んだ。

「そうだ！」

「政府は何をしている！」

次々と怒号が上がる。それはガポン司祭の意図したことではない。

「皆さん落ち着いて」

司祭がなだめる。これはあくまで、魔法皇帝に現状を訴える為の集まりだ。市民の窮状を伝え、魔法皇帝の慈悲を請う貯めの集まりだ。

皇帝は教会の守護者。自分が立ち上がれば、きっと伝わるはず。司祭はそう信じている。そしてその為には、先ずは皆が冷静にならなくてはならないとも知っている。

「皆さん。冷静に。我々は争いにいくのではないのです。話し合いでいくのです」

「だが司祭様……」

「お静かに。今は忍ぶのです。肅々と。我々の姿を、皇帝陛下にお伝えするのです」

市民が黙った。

ノエルはその市民達の中で、首を巡らす。工場勤務の者。ノエルと同じ貧農と思しき者。戦地帰りと見える者。皆貧しい身なりと、険しい顔をしている。

「いきましょう」

ガポン司祭が力強く頷く。教会の前を離れ、歩き出す。且指すは

冬の宮。魔法皇帝の下。

「……」

動き出した市民の中で、ノエルも歩き出した。

田をそらしてはいけないことが起きてている。そう感じたからだ。

首都サンクトペテルブルクは、異様な雰囲気に包まれていた。  
前日の土曜日、大規模な職務放棄　ストライキが組まれた。先導したのは国内に潜伏した、空想科学的・社会意義者達。

多くの工場が操業を停止し、工員が待遇の改善を求めて工場に座り込みをした。

業を煮やした工場主の一部は、軍隊に出動を要請した。軍は治安維持を名田として、要請のあつた工場の周辺を兵で固めた。

まさに一触即発。工員と兵士が、工場の内と外で睨み合つ。

それでもストは続行され、街全体を張りつめたような緊張感が包んだ。日が暮れるまでストは続き、軍は撤収した。

ストは一応の目的を果たした。多くの者がそのことに安堵し、達成感を噛み締めていた。

だが一部の者は、軍が退いたのは、次の事態に備える為だと分かっていた。

ストライキは言わば『静』の抗議運動。この成功に酔う者は、次の成果を求めるだろう。目に見える成果を欲するだろう。

そうなれば次は『動』だ。実際翌日曜日には、教会の同祭の先導によるデモ行進が計画されていた。

ほんの少しのいき違いで、パニックになりかねない。それを押さえる為にも、聖職者が先導を買って出た。だが

冬の宮を目指す市民の数は、折からの雪にもかかわらず、時間が経つに連れて増えていった。先導するのは教会の司祭。そのガポン

司祭には、内心焦りがあった。

「多い……これほどの市民が参加するとは……」

予想以上の数の市民が、デモ行進に参加した。デモの道に選んだ、この首都最大の目抜き通り ネフスキーダ通りが、市民で埋め尽くされている。

いや多過ぎると、ガポン司祭はその数に困惑する。

デモに参加する市民の数は、それはそのまま困窮を訴える力になる。

だがあまりに多過ぎる参加者は、全体の統率にかかる。革命を望む過激派が、これを好機と捉えるかも知れない。

ガポン司祭はあえて、白青赤が上から横長に並んだ三色旗を、仲間に掲げさせた。

国旗だ。白が高潔。青が正直。赤が勇氣。それがこの色に込められた意味だ。

国を割るようなことは、許しはしない。その決意の為に、この旗下でガポン司祭は皆を行進させた。

「お守り下さい……」

雪に翻るその旗を一度見上げて、司祭は聖母に祈りを捧げた。

## 1-4 目の皿羅田

首都サンクトペテルブルクの冬の宮。それは魔法皇帝の居城。離宮として建てられたその豪奢な建造物は、城としては堅固なイメージを見る者に与えない。

冬の長く厳しいこの国において、左右に大きく広がるその宮殿は、まるで凍える我が子を抱き締めようとする母親のような懐の深さを感じさせた。実に女性的で柔らかな城だ。

実際運河 ネヴァ川こそ天然の要害として背後に要するが、前面は人々が集まる広場になっていた。それもまたこの宮殿の寛容さを表していた。

そして飾り窓が悠然と並ぶその姿は、触れば碎けるかと思われる程優美だ。まさに雪の結晶のような儂わとせりびやかさで、この地を訪れる人々を魅了していた。

この国の冬の姿そのもののような冬の宮は、冬の帝国の臣ひとつて誰しもが仰ぎ見る誇りの建物だった。まさに皇帝 シアーリの住まいに相応しい宮殿だ。

その冬の宮前の広場で、デモ隊と兵士が睨み合っていた。

冬の宮前で待機する兵士達は、極度の緊張状態にあった。冬の宮は魔法皇帝の住まい。そしてデモの最終目的地。士官は魔法皇帝から命令を受けている。どんなことがあっても、市民に危害を加えてはいけないと。厳命だった。

市民への危害は厳禁だと詰つ。しかしそれは、この数を想定した上での命令だらうか？ 冬の宮前を固める軍隊の士官はそう思つ。このまま數に任せて冬の宮に雪崩れ込まれては、魔法皇帝を守れない。士官はやはり古々しきうそう思い、デモを先導した同祭を見つめた。

「皆さん落ち着いて下さー」

そのガポン同祭は、ともすればいきり立つデモ隊をなだめること

に、多くの神経を使つていて。市民の怒りは伝えなくてはならないが、まともに怒りをぶつける訳にもいかないのだ。

「ガポン司祭。市民を解散するよつこ」

幸い士官は冷静な人物だった。武器など持たない司祭に合わせて、士官も丸腰で前に出る。サーベルすら部下に預ける慎重さを見せた。兵士達にも銃口を空に向かせている。

「分かっています。ですがまずは何らかのお約束が欲しい」「約束ですか？」

「はい。集まつた市民の数が、それだけ我々の窮状を表しているのだと、思つていただきたい」

「魔法皇帝は慈悲深いお方。元より臣民の生活には、深く心を痛めていらっしゃる」

だから言われるまでもない。そういう否定の言葉だ。そう言つて士官は、まずは軽く拒否の姿勢を見せる。簡単に要求を通しては、市民の中に達成感が湧かないからだ。

「魔法皇帝は聖教会の守護者。民の味方。元より我々の窮状を察し、心を痛めていらっしゃることは重々承知しております」「ほう……」

「ですが。あらためてお願ひ申し上げます」

ガポン司祭は内心の焦りと戦つ。要求がすぐに通るとは思つていない。またすぐに受け入れられるよりは、多少時間をかけて要求を通した方がいい。その方が難しい望みを、魔法皇帝が聞き届けて下さつたと、市民の心証を良くすることができるからだ。

相手の士官も心得ているようだ。

だが市民の数が多い。それだけに市民以外の者も潜伏しやすい。過激な革命論者が潜伏していると見て間違いない。彼らが何らかの行動を起こす前に、約束を取りつけなくてはならない。

革命論者も機会を窺つているはずだ。要求が出切つていないので過激な行動に出ても、周りを煽動する」とはできない。かといって機を逃しては、平和裏に終わってしまう。

早過ぎる、遅過ぎる。駆け引きの終わりを、彼らは見極めようとしているはずだ。

「聖教会の守護者であらせられます、魔法皇帝——」

司祭の言葉が終わる前に、小さな物影が頭上を飛んでいった。

「 ッ！」

司祭と士官が同時に互いの目を見る。投石だ。不満を暴力の形に表した小さな石だ。だがこのたつた一石が、暴動のきっかけになりかねない。

石は最前列の兵士の胸に当たって地面に転がっていく。その乾いた音が広場に響き渡った。

兵士が息を呑み、市民がざわめいた。

「 皆さん！ 冷静に 」

ガポン司祭はすぐさま振り返る。

冬の宮前の市民と兵の間に、触れれば破裂するような緊張感が漂っていた。

といけない。

パン……

だが投石に続いたのは、小さな銃声だった。

「 グッ……」

兵士に背中を見せていた司祭が、背後から撃たれた。受け身もとれないままに地面に倒れる。

「 キヤーッ！」

市民から悲鳴が上がった。

「 誰が発砲を許可したか！」

士官が叫ぶ。だが叫びながら氣づかされる。革命論者は兵士の中にも紛れ込んでいたのだ。

「 このつ！」

「 司祭様を守れ！」

「 あいつらを許すな！」

次々と市民が そしてその中に紛れた革命論者が 怒号を上げる。雨霰と投石が始まる。

「待て！ 動くな！ 発砲は許可しない！」

今にも各々の判断で銃を向け出した兵士を、別の士官が抑える。市民への危害は許されていない。魔法皇帝の敵命だ。市民に銃を向ける訳にはいかない。

だがそれは逆効果だった。兵士が動かないと見るや、市民は勢いを増し一気に前に出た。あつという間に何人が司祭を取り囲み、その他の人間が士官に向かった。

司祭にいち早く駆け寄ったのは、黒髪の少女だった。

輝く澄んだ瞳を潤ませて、少女が司祭の耳元にひざまづく。左右で束ねられた艶やかな黒髪が、一度両脇にフワツと広がつてから肩に向けて落ちていた。しなやかな曲線を描くその黒髪が、優雅に一つ大きく揺れた。

「司祭様！」

「君は……あの時の……ぐ……私は大丈夫です……皆さんは……」

司祭は苦しげに、そして気丈にも口を開いた。脇腹から一際激しく鮮血が吹き出した。

「そんな……まずは司祭様です……」

少女はそう言つと、司祭の耳元へとその可憐な口を寄せ。そして司祭の脇で、治療の魔法を唱え始めた者にすら聞こえない程小さな声で、

「この革命に、尊い犠牲を捧げるのはね……」

悪意に歪んだ笑みを浮かべながら、そう呟いた。

## 一、「血の田羅田」

「キヤーッ！」

一際大きい悲鳴がした。雪崩れ込もうとしていた市民の足が一瞬止まる。見れば司祭に真っ先に駆け寄った黒髪の少女が、真っ青な顔で立ち上がっていた。そしてその足下では

「…………論者…………過激…………は…………か…………」

ガポン司祭がそう呟いて、がっくりと首を垂れた。

「おのれ！」

「司祭様が！」

市民が色めき立つ。一度は止めた足を怒りで踏み鳴らし、兵士に向かつて駆け出す。司祭が掲げさせた旗すら、放り出して向かっていく。

「止まれ！」

士官が叫ぶ。だが市民の耳には届かない。投石に対して発砲で応えたのだ。市民は怒りに身を震わせ、士官の言葉に耳を貸さずにいきり立つ。

「クソッ……」

ガポン司祭との交渉にあたっていた士官が、市民の波に飲み込まれた。

「助け出せー！」

やむを得ず別の士官が命令を下す。発砲は未だ許可していない。厳命を守りつつ、この場を抑えるつもりだった。だが一度目の発砲が全てを台無しにした。

パンッ！

「キヤーッ！」

女性の悲鳴とともに、人波が割れる。その割れた人波から倒れて出てきたのは、交渉にあたっていた士官だった。

額に穴が空いている。即死なのは遠目にもすぐに兵士達に知れた。

市民の一人が短銃を構えて震えていた。銃口から立ち昇る煙を見る  
までもない。士官は市民に撃たれたのだ。

「おのれ！」

そう毒づいた別の士官は自分が発砲を許可したのかどうか、後に  
なつても思い出せなかつた。

だがあもつ事実は変わらない。市民への発砲が始まつた。銃声が銃  
声を呼び、悲鳴が悲鳴を呼んだ。そして銃声と悲鳴が互いを呼び合  
つた。

冬の宮前は、その寛容さとは裏腹に、阿鼻叫喚の地獄と化した。

ノエルは遠くで銃声を聞いた。

歩く度に人が増えていくデモ行進。自分でもよく分からぬ高揚  
感を覚えながら、皆について歩いた。先頭は随分と先だ。このまま  
歩いて終わりなのか、最後に何かあるのかノエルにはそれすら分か  
らない。

だがノエルは正しいことをしているのだと思つた。家に帰つたら、  
母とポチヨムにこの様子を話してあげようと思つた。自分には関係  
のないことだと思わずに、デモに加わつて力になつた。自分は皆と  
正しいことをしている。一人とも褒めてくれると思つた。

しばらくすると、デモの行進が止まつた。大人の背中で前がよく  
見えない。つま先立ちで背伸びをすると、冬の宮の屋根がかろうじ  
て見えた。

どうせここまできたのなら、冬の宮を間近で見たい。もしかしたら  
魔法皇帝を一目見ることができるものかもしれない。そう思つとノエ  
ルは、少しだけ緊張感が解けた。

デモと言つても歩いているだけ。聖教会の守護者たる魔法皇帝に、  
これも聖教会の司祭が会いにいく。それはごく自然なことだ。

もしかしたら魔法皇帝の声でも聞こえはしないかと、ノエルは背  
筋を伸ばした。どうせなら少しでも多く、土産話を持つて帰つてあ

げたい。そうも思つた。

銃声が鳴り響いたのはその時だつた。

「何?」

その銃声に驚いて辺りを見回したのは、ノエルだけではなかつた。皆がお互いの顔を見て、不安にざわめいている。

「何? 何ですか?」

「さあ……」

銃声なのは誰の耳にも明らかだつたが、その大人は答えをばぐらかした。

遠くから聞こえた、小さく乾いた破裂音。銃声  
いや銃声などとは俄には、信じられない。信じたくない。聞き間違いだと思つた。

「おいつ……」

もう一つ銃声が聞こえた。同じく小さい破裂音。誰もが隣の者と顔を見合ひます。昨日のストでも軍隊は出動していました。今日も冬の宮の前には、多くの兵士が警備にあたつてゐるといふ。  
デモの民衆がざわめく。良くない想像に心を乱されながらも、それでもそれを信じようとせず、その場でお互いの顔色を窺つた。

「は……だ……」

それは遠くからの小さな声だつた。ノエルは耳を澄ます。

「はつ……ほ……だ……」

それは少し遠くからの小さく、幾人かの声だつた。ノエルは耳に意識を集中する。

「発砲……だ……」

それはもう耳をすまさなくて聞こえる、悲鳴まじりの声だつた。多くの者が、より多くの者に伝える為に声を張り上げる。

「発砲だ!」

「逃げろ! 奴ら撃つてきた!」

「戻れ! 下がれ!」

怒号が飛び交う。それに混じつて聞こえてくるのは、間違いなく

銃声だ。市民が雪崩を打つて動き出す。悲鳴を上げながら、他の者を押し退けながら、人の流れが渦と化す。

「キヤーッ！」

力のない者が押し倒された。逃げ惑う民衆の中で、押され、押し退けられ、足をかけられ、倒れていく。銃声はますます大きくなる。「大丈夫ですか？」

自分の横で転んだ女性に、ノエルがとっさに手を差し出す。そのまま手すら押し退けて、周りの民衆は逃げ惑う。また銃声がした。自分を押し退けて去っていく大人を、ノエルは睨みつける。だがすぐに人に紛れてその背中は見えなくなつた。

銃声と悲鳴がした。

ノエルは思わず首をすくめる。女性は足をくじいたのか、起き上がりうとしない。腰を地面に落とし、足首を手で押さえている。ノエルは民衆に押されて、女性から離される。

そこかしこで悲鳴が上がる。自分も逃げなくてはならない。女性からは離されていく。女性は自分が手を貸さなくとも、他の大人が何とかしてくれる。ノエルは一瞬そう思つてしまつ。

一際大きい銃声がした。

ノエルは思わず目をつむる。そして更に悲鳴。ノエルは恐る恐る目を開けた。女性の姿は小さくなつていて。ノエルの体は更に押し流されていた。すぐに入波に紛れて女性を見失う。

だからもう他の人に任せてい。銃声。自分のせいではない。銃声。ノエルはそう思おうとする。悲鳴。だが体は前に出ようとすると怒号。人の波を押し退けようとする。罵倒。一人流れに逆らうノエルに、ぶつかつた大人が罵声を浴びせる。

銃声。銃声。銃声。連續して聞こえる発砲音は、確実に大きくなつていて。近づいてくる。

悲鳴。怒号。悲鳴。ノエルは歯を食いしばつて前に進んだ。怒号。罵倒。悲鳴。人の流れに逆らうのは、思つた以上に難しかつた。そして聞こえてくる悲鳴。心が怯みそうになる。それでもノエルは前

に進む。更なる銃声がノエルを脅かす。

だが

「大丈夫ですか？」

ノエルはまだ地面に倒れたままの女性に、手を差し出した。人波をかき分け、やつと見つけた女性は、同じ場所でうずくまつたままだつた。

「あなたは……」

「大丈夫ですよ」

ノエルは自分にできる精一杯の笑顔を浮かべた。母が自分に心配させまいとする時の笑顔だ。

収穫が上手くいかない時にする笑顔。母の『ご飯だけが少ない』と、内心思つた時に見せてくれる笑顔。父が亡くなり自分も泣きたいだろうに、娘を心配させまいとした時に見せた笑顔だ。

「掴まつて下さい」

ノエルが女性に肩を貸す。その女性のもつ一方の肩を、見知らぬ男性が慌てて掴んだ。

「お嬢ちゃん達！ 大丈夫か？」

「ハイツ！」

ノエルはその男性に、力一杯返事をする。同時に呪文を詠唱した。

「痛みが…… 痛みが退いていくわ……」

「お嬢ちゃん。魔法が使えるんだね？」

「はい」

三人が歩き出す。女性は恐る恐る足に力を入れて、ノエルの肩から手を離した。

「ありがとう…… 歩けるわ…… ウソみたい」

「そうですか。でも、まだ一緒に」

「キヤーツ！」

遠くからの悲鳴に、ノエルが立ち止まる。女性にとられていた意識が一瞬で周囲に向かう。

「君？」

女性に肩を貸してくれた男性が、ノエルに振り返る。

だがノエルに合わせて、彼まで足を止める訳にはいかない。女性は歩けるとはいえ、まだ足取りがおぼつかない。彼も一時でも早く逃げなくてはならない。

「君！ どうした？ 逃げないと！」

ノエルは振り返る。男性の声が少し遠くなつた。ノエルはあらためて周りを見回す。

「いいかい！ 逃げるんだ！ いいね！」

「……」

最後まで言葉をかけようとする男性の声を背に、ノエルは周りを見渡す。

悲鳴が聞こえる。逃げ惑う群衆の中に、痛みに耐える悲鳴が聞こえる。悲しみに耐える嗚咽が聞こえる。助けを求める声が聞こえる。

「今…… いくわ……」

ノエルは人の流れに逆らつて、歩き出した。

## 一、血の田羅田6

首都の中心に近づくにつれて、混乱は拍車をかけていた。

逃げ惑う市民と、兵士に対抗しようとする市民。商店が焼き討ちされている。馬車や屋台がひっくり返され、臨時のバリケードが幾つも作られていた。

迎え撃つつもりか、銃を持った市民もいる。軍の本体はまだまだ先のようだ。だが何人かの市民が気勢を上げて、兵士を迎へ撃とうとしている。

ノエルには見えなかつたが、首都の中心はもう暴動と呼んで他ならぬ状況になっていた。

そして軍隊はその鎮圧に乗り出している。デモとその監視ではなく、暴動とその制圧に市民と軍の関係は変わってしまった。

ノエルは足を引きずる男性に出くわした。肩も押さえている。ノエルは迷わず呪文を唱える。

「これは……」

男性は目を見張つた。一瞬で痛みが退いた。すれ違いざまに呪文を唱えた少女。その小さくなつていく後ろ姿を見送る。

ノエルは路肩で倒れ、歩けなくなつていた親子を見つける。

母親は足を撃たれたようだ。三つ程の子供がその側で泣きじゃくりつている。母親が逃げる人に子供を託そうと、必死で手を伸ばした。一人の女性が子供を抱きかかえ、母親も立たせようと手を伸ばす。母親は首を横に振る。泣き叫ぶ子供を女性に押しつけて、一人だけは逃がそうと、自分はいいと必死に首を振る。ノエルは全ての魔力を、その母親に向けた。

「足が……」

近づいてくる少女から聞こえる呪文の詠唱。見る間に痛みが退き、出血が治まっていく。

「あなたは……」

女性が呆然と咳く。ノエルが近づいて手を貸した。ノエルと女性に支えられながら、母親が立ち上がる。子供が泣きじやくりながら、母親にしがみついた。

「いつて下さい！」

ノエルが叫ぶ。力強い言葉だった。

その後もノエルは怪我人を見つけると、すぐに近寄つていった。そして瞬く間に怪我を治していく。その様子はすぐに幾人かの民衆の目に止まつた。

「こっちも頼む！」

「任せて！」

むしろ向こうからかかり始めた声に、ノエルは脇目もくれず駆け寄つていく。ノエルは暴動で傷ついた人を、魔力で持ち上げた。誰も手を触れていないのに、怪我人が次々と持ち上がる。

「すごい……」

気勢を上げていた大人達から、歓声が上がる。魔力に優れる人間は数多い。だが、少女の魔力はまるで別格に見えた。その力も、その発動のスピードも。

そして何よりその使い手の、優雅な仕草

多くの者が、思わず見とれてしまう。怪我人は、暴動の渦の中から、次々と助け出される。ノエルは舞うかのように可憐に腕をふるい、歌うかのように澄み切つた声で呪文を唱える。そして怪我人の為に念を凝らす様は、まるで祈りを捧げる聖母のようだつた。

怪我人は持ち上げられた端から、癒されていく。助けられた怪我人の表情は、体の傷とともに、心まで癒されているかのように穏やかだつた。

「すごい……」

ノエルの周りの人だからが、同心円を描いて広がる。皆、一人の少女が起こす奇跡に目を見張る。何人かが思わず、祈りに手を組んだ。

「こっちだ！ こっちも頼む！」

「任せて！ 今いく！」

声がしたのは奥の方だ。行進に対する前面からの発砲。怪我人は奥に、先頭にいくほど多い。暴動の更に中心へ。助けを求める人の為に、ノエルは駆ける。

「こっちも…… こっちも…… 頼む……」

「今いくわ！」

ノエルは呼ばれるがままに、身を翻す。そしてノエルは己の力の全てを、必要なところに集中する。怪我人を見つける為の目。怪我人に魔力を向ける為の腕。怪我人を癒す為に詠唱する唇。怪我人に近寄る為に、力を込めて前に運ぶ足

「大丈夫よ！ 待つてて！」

ノエルは気がつかない。怪我人にしか、意識がいかない。自分が何処に向かっているのかに、気がつかない。

「今！ 今いくから！」

ノエルは奥へ奥へと、吸い込まれていく。怪我人の為に。一人でも多くの人を救う為に。奥へ奥へと…… 暴動の 虐殺の 更に、中心へ…… 人々の悲鳴の中へ…… 冬の宮へと続くネフスキ一大通りを奥へ奥へといく……

「待つてて！ 今」

ノエルは立ち止まる。突きつけられた現実に立ち尽くす。

「 ッ！ えつ？」

辿り着いたそこは、今までに兵が市民に銃弾を浴びせかけている弾圧の最前線だった。

「 ウソ……」

ノエルの目の前に据えられた銃口から、

「 ッ！」

一発の銃弾が射ち出された。

## 「マリー殿。ノエル殿は？」

朝から姿の見えないノエルの姿を探して、ポチヨムは家の中で首を巡らせた。

「珍しく日曜礼拝にいくつて言つてましたけど…… ちょっと遅いかしら……」

マリーも不安げに、窓の外を覗く。娘の代わりに外に見えたのは、その友人の父親だ。

「バーブさん！ あんたのところは無事か？」

風花の父 工藤ライカが息せき切りながら、ドアを開けて入ってきた。

「どうしました？ ライカ殿」

「首都でデモだ！ いや、暴動だ！ どうも兵隊が発砲して…… 怪我人も出てるらしい！」

「何ですと？」

ポチヨムは思わず、四肢に力を入れる。兵隊。発砲。怪我人。ポチヨムの記憶がうずく。

「大混乱らしい！ プーシュカ 大砲すら持ち出されそうな、暴動が起こってるって！」

「そんな！ ノエル！」

「ノエルちゃん…… 首都にいるのか？ まづいぞ…… デモ隊も兵隊も大混乱だ。巻き込まれてないか……」

「ノエル！」

「ダメだ！ バーブさん！ あんたまで巻き込まれる！」

慌てて外に飛び出そうとするマリーを、ライカが押し止めた。

「ライカ殿。マリー殿を頼む！」

ポチヨムがそんな二人を押し退けて外に出ようとすると、

「あんたこそ、ダメだ。その……」

「ライカ殿！ その先は…… 心の中だけに……」

ライカの言い淀んだ先を、ポチョムが察する。ポチョムのような魔法のマスクット猛獸が、このような郊外に身を寄せている。身を隠している。どう考へても訳ありだ。

ライカは察して、黙つていてくれている。知らなかつた。事情は分からなかつた。いざとなれば、そういうことにしなくてはならない。

「ポチョムさん……」

マリーがポチョムの背中に、声にならない声をかける。娘の安否と、ポチョムの安全。いや、娘の命とポチョムの命。秤にかけていいものか、マリーには分からぬ。

「マリー殿……」

ポチョムは後ろを振り向いた。マリーに甘えるように、首をこすりつける。自分の匂いをマリーにすりつけ、鼻が弱っている分大きく息を吸つてマリーの匂いを心に刻む。

「ワシなら大丈夫…… 必ずやノエル殿を連れて帰つてきますから

……

ポチョムは優しく微笑み、マリーの姿を脳裏に焼きつけると家を飛び出した。

ノエルは自分の身に何が起こつたのか、すぐには分からなかつた。熱い。とにかく熱い。右足が焼けるように熱い。そして、熱さの後、やつと痛みがやつてきた。

「キャーッ！」

ノエルは自分の足を押さえ、街道の石畳の上に倒れ込む。血が吹き出した。すぐに止まるような出血には見えない。貫通した弾丸は、太ももの前と後ろに、穴を空けていた。

「ウ…… ウワーッ！」

ノエルを撃つた兵士が、叫び声を上げる。尚もノエルに銃口を向

けていた。銃口が震えている。その兵士の怯えそのもののよつて、  
鉄の塊が震えていた。

「う…… 撃たないで……」

「う…… 動くな……」

兵士は怯えている。威嚇の為、更に銃口を前に出す。

「イヤツ！」

「ヒツ！ う！」…… くなつ！』

兵士が自分の中の恐怖に負けて、引き金を引いた。  
『キヤーツ！』

周りの市民が潮を引くように逃げ出す。

「 ッ！」

ノエルが声にならない悲鳴を上げる。左足のスネを打ち抜かれた。  
「ウワツ！ ワワツ！ ワアツ！ ワーツ！」

兵士が叫ぶ度に、銃口が火を噴く。四発のうち、一発がノエルに命中した。一発がノエルの左足太ももにめり込む。今度は貫通しなかつた。もう一発は、左肩を打ち抜いた。

「く……」

ノエルは全身の痛みに、一瞬意識が遠のく。自分を撃つた兵士が、  
弾切れにもかかわらず、更に引き金を引いているのが音で分かる。  
周りは似たような状況だ。

逃げ惑う市民。自身も恐怖に逃げ出しそうになりながら、市民に銃を向ける兵士。

人々を支配していたのは、恐怖だった。

銃を持つた兵士に対する恐怖。銃持つた自分達より数の多い市民  
に対する恐怖。殺さないと相手に殺される恐怖。逃げ惑う人々に押  
し潰される恐怖。上官の命令に従わないと、自分の身が危ない恐怖。  
殺さなければ、殺されるという恐怖。次は自分だという恐怖。力によ  
る恐怖。恐怖そのものを恐れる恐怖。

そしてこの恐怖がいつ終わるのか、誰にも分からぬ恐怖に、市  
民は更に恐怖した。

## 一、血の日曜日

ポチョムは駆けた。町を駆け抜けた。人々の驚く顔など構つてはいられない。町を縦断し、もう一度街道に出れば、後は真っ直ぐ首都だ。

「これは……」

その首都サンクトペテルブルクからは、嫌な匂いが漂つてくる。不吉な匂いだ。人間並みに落ちてしまつたポチョムの鼻でも分かる。まず鼻につくのは煙の匂い。多くはものが焼ける匂いだが、その中に混じつた火薬の焼ける匂いが、一際ポチョムの心をも焦がそうとする。

そして少し遅れて肉の焼ける匂いがする。熱い鉄に焼かれた肉と血の匂いだ。

「何ということだ……」

肉と血の焼ける匂い。その匂いとともに、悲鳴を上げる人々の顔が浮かぶようだ。自身の反乱の際に、散々と喰いだ匂いだ。

間に合ってくれ

そう願いながら、ポチョムは駆ける。街道を駆ける。四肢の限り、魔力の限り駆ける。

首都が僅かに視界に映つた。駆ける視界で揺れる首都は、そのまま激動に揺らぐこの国そのものにポチョムには見えた。

乾いた銃声が聞こえた。人の命を奪つているとは思えない程、あつけなく小さな音だ。反乱の際に銃撃で死んでいった仲間の姿が、ポチョムの脳裏に思い浮かぶ。

「ノエル殿！」

ポチョムは力の限り四肢に魔力を送り、街道を駆け抜けていった。

ノエルを撃つた兵士は、恐怖からか、奇声を発しながら人々の向

こうに去つていった。

「どうして……」

ノエルは自分の状況が信じられない。撃たれて血を流している自分が。信じられない。

「く……」

何人かの民衆が、ノエルにつまづき、あるいは踏みつけながら逃げ惑う。

ノエルもこの場を離れようとした。だが足に力が入らない。冷たい石畳の上を手で這う。意識が遠退きそうになる。

「お母さん……」

「お…… 父さん……」

「お母さん……」

「お…… 父さん……」

誰かがノエルにぶつかった。ノエルは力なく地面に突っ伏す。

「お…… 父さん……」

ノエルは足を踏まれる。形容しがたい痛みが走る。

「 ッ！」

思わず足を触ろうとした。だが触つていいのかどうかも分からない。あつという間に赤く腫れあがる。

「 …… ポチョム …… クン ……」

ノエルは歯を食いしばり、遠退く意識をからうじて引き止めた。

ポチョムは首都に入つても、力を緩めず駆け抜けた。

「ノエル殿！」

ポチョムは自分の鼻に、魔力を集中する。失われた嗅覚を魔力で呼び戻す。

血と鉄の焼ける匂い。そして火薬の匂いがポチョムの嗅覚を、そして脳を直撃した。

ただの匂いだというのに、ハンマーで殴られたかのような衝撃だ。ノエルのことがなければ、すぐにでも魔力を解除するだろう。

強烈な負の匂いが、辺りに充満していた。このまま魔力を鼻に集中していくは、最後には鼻がいかれてしまう。ポチョムはそのこと

を本能で悟る。

それでも魔力は途切れさせない。ノエルを見つける為なら、今のポチョムなら己の心臓だつて差し出すだろう。

「虎だ！」

突然のアムールタイガーの乱入に、市民が混乱する。

ただでさえ逃げ惑い、押し退け合っていた群衆だ。今きた道に戻ろうとする者。脇にそれようとする者。仲間とはぐれて首を方々に巡らし、立ち止まる者。前の状況が分からず、後ろから押す者。倒れてしまい、皆に踏みつけられる者。地に伏せ、そのまま動かない者

元々の混乱に、ポチョムの出現が一部で拍車をかけた。  
だがポチョムは構つていられない。この混乱の中にノエルがいるのだとすれば、一刻も早く助け出さなくてはならない。

「こっちには兵士がいるんだ！」

群衆の誰かが叫ぶ。

「怪我人が！ 怪我人がいる…… 通してくれ！」

「撃つべきやがった…… あいつら…… 倘達をなんだと……」

「逃げる！ 本気だ！ 兵士の奴ら本気で俺達を」

最後の男性の声は、銃声とともにそこで途切れた。

「ノエル殿！」

ポチョムが叫ぶ。ノエルの匂いが微かにする。だが、ここを通つたであろう。その程度の僅かな残り香だ。

「どけ！ ぞいてくれ！」

ポチョムは更に奥に進もうとした。だが群衆は発砲から逃れる為に、こちらに死にものぐるいで駆けてくる。

「クソ……」

ポチョムは思わず爪を地面に立てる。この群衆を、爪と牙でかき分けて進みたい。弾き飛ばしてやりたい。我知らずそう思つてしまう。

ポチョムが本気を出せば、人間は紙切れのように吹き飛んでいく

だろう。

「ダメだ……」

ポチヨムは目をつむって首を振る。その考えを意識して振り払う。ノエルの笑顔が脳裏に浮かんだ。ノエルはそんなことを望みはしない。ポチヨムにも分かつている。

ポチヨムは一步前に踏み出した。やはり群衆に押され、思うように進まない。たつた一步すらもどかしい。

「グオオオオオッ！」

ポチヨムは吠えた。力の限り吠えた。自分のふがいなさに吠えた。太い四肢も、強靭な顎も役に立たない。巨躯も、しなやかな筋肉も飾り物のようだ。魔力も魔法も、何の為に身につけているのか分からぬ。その情けなさに、ポチヨムは吠えた。

だがその咆哮が、僅かに群衆を左右に分けた。ポチヨムの前の人々の波が微かに開く。

「ガアーッ！」

ポチヨムは憤りのままに、咆哮を上げた。その僅かな隙間に突撃する。人垣が更に割れる。

「ノエル殿……今、いく！」

ポチヨムは人垣を己の咆哮でかき分けながら、かろうじてノエルの匂いのする方へと急いだ。

## 一、血の田羅田

白い軍服の胸が大きく上下した。胸に飾られた勲章が、その声に含ませ波打つように揺れる。

「バカ者！」

魔法皇帝　　一二〇ライ一世　　は叱責する。冬の宮の謁見の間で、大臣から報告を受けた。テモは暴徒と化し、兵はその鎮圧に乗り出したと言つ。

「何とこうことか……」

そしてそのまま、歯を食いしばる。奥歯がギリッと鳴る。砕けたかと思う程の音だった。

「……それは……」

要領を得ない大臣の報告。それ以前に聞こえてくる銃声と怒号。何より市民の悲鳴。どんな惨劇が行われているか、想像するまでもない。

「厳命と申したはずだ！」

「は……」

魔法皇帝の激昂に、大臣はただただ縮こまっている。まるで役に立たない。

「ラ」

魔法皇帝は思わず、皇帝直属の僧侶の名を呼びかける。僧侶はいなかつた。彼は今、皇子の病氣治療で席を外している。そんな簡単なことも失念していた。

「もういい！　直接指揮を執る！」

他の者に任せてもおけない。苛立つ心そのままに、魔法皇帝は席を立つた。

ポチヨムは人々が逃げ惑うネフスキーダ通りを、奥へ奥へと駆け

抜ける。血の匂いと、肉の焼ける匂いが一際鼻につく。だが求めていた匂いが最もする通りだ。

ノエルはここにいる。ポチヨムはそう確信する。

「ノエル殿！」

ポチヨムは後ろ足で立ち上がり、周囲を見回す。自分程巨大な獸がいて、目立たない訳がない。ポチヨムの声を聞いたノエルが、これで自分を見つけて駆け寄つてくる。そう考えた。

「ノエル殿！」

ノエルは現れない。人々が自分を遠巻きに避けて、逃げ惑う。ノエルはこの人波に呑まれて、上手く動けないのかも知れない。自分から見つけなくては。ポチヨムはそう思つた。

「ノエル殿！」

ポチヨムは首を巡らす。匂いは強烈だ。ノエルはここにいる。だがノエルの姿が見えない。こちらを呼ぶ声もしない。ノエルは優しい娘だ。誰か怪我人の手当でもしていて、こちらに振り向けないのかもしれない。ポチヨムはそう信じた。

「ノエル殿……」

駆け寄りもせず、返事もなく、姿すら見せない。

ポチヨムは低く唸る。あつてはならない考えにとらわれる。ポチヨムは考えまいと首を振る。

そしてその時、視界の端に何かが映つた。

逃げ惑う、人々の足の間に だ。

ポチヨムは怒りのあまり歯ぎしりをする。

あんな優しい娘が、血溜まりの中で倒れていいはずがない。逃げ惑う人々に、踏まれていいはずがない。曲がるはずのない方向に、足を曲げていいはずがない。

「グアアアアアアツ！」

ポチヨムは人波を弾き飛ばしながら、ノエルに向かつて突進した。

ポチヨムは一際大きく跳躍すると、ノエルの上に覆いかぶさった。

「グアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

渾身の力で、声の限り周囲を威嚇する。誰も近づけない。もう誰にも傷つけさせない。誰の目にも触れさせない。沸き上がる怒りのままに、ポチヨムは咆哮した。

「……ポチヨムくん……」

ノエルが小さく呟く。その弱々しい声が、ポチヨムの心を引き裂く。

「「めんね…… ポチヨム…… クン……」

「話さなくていい……」

逃げ惑う人々から守る為、ポチヨムが己の四肢の下でノエルをかばう。遠くに兵士の姿が見える。市民に発砲しながら、こちらに近づいてくる。

「……ごめ……」

「話さなくていい！」

ポチヨムは自分の魔力の全てを、ノエルの傷に向けた。まずは血だ。出血を止めなくてはならない。痛みを和らげてあげたい。安全なところに運んでやりたい。励まして力づけてやりたい。そんな当たり前の願いすら、今のノエルの為には後回しにせざるを得ない。ノエルの顔は蒼白だ。血が足りていない。これ以上の出血はさせられない。

兵士が近づいてくる。人々が逃げ惑う。ポチヨムが唸る。ノエルには指一本触れさせない。睨みを利かす。

だが狂氣と恐怖に取り憑かれた人々は、ポチヨムの気迫にすら負けずにこちらに流れてくる。

「ガアアアアアアツ！」

ポチヨムが吠える。怒り任せて吠える。牙をふるいたい。爪を食らわせたい。魔力で蹴散らしたい。ノエルの安全の為なら、他の誰

をも犠牲にしても構わない。そう思つてしまつ。

だが

「……」

ノエルがポチョムの足を掴む。その温かくも冷たい手。ポチョムが耐えている。それがノエルには分かる。だから力づけようと、力の入らない手でポチョムに触れてくる。その思いが、ポチョムの足を通じて伝わつてくる。

「ノエル殿……」

出血は止まつた。ノエルはそれでも歯を食いしばつてゐる。痛みが退かないのだろう。ノエルは立ち上がるうとしない。できないのだろう。だがいつまでもここにいては危険だ。

ポチョムは思い切つて、ノエルの襟足をくわえた。

「 ッ！」

ノエルが声にならない悲鳴を上げる。

構わずポチョムは地面を蹴つた。衝突の最前線を逃げ去り、今きた道を引き返す。乾き切つていなノエルの血が、点々と地面に滴り落ちた。

逃げ惑う人々を避け、ポチョムはノエルと人気のない民家に逃げ込んだ。傷に響かないようにと、ポチョムはゆっくりとノエルを壁にもたれさせる。

「……ボ……」

「話さなくていい……これ……」

ポチョムが魔力を込めて念じる。ガラスの小瓶が現れた。床に直に座るノエルの前に、ゆっくりと漂ってくる。

「……」

「超タウリン。一口だけですぞ……」

いつぞやのかすり傷とは、怪我の具合も深刻さも何もかもが違う。飲んだ分だけ治るのなら、目一杯飲ませてやりたい。だが超タウリンは劇薬だ。弱った体には、毒そのものだ。

ポチョムはノエルに一口だけ舐めさせ、徐々に回復させるしかないと考えた。

「……」

ノエルは見るからに痛々しい腕でビンを掴む。

その血だらけの腕から、思わずポチョムは目を背けてしまつ。

「グ……」

一口舐めただけでノエルはやはりむせてしまつ。そしてその衝撃にビンを落としてしまつた。

「あ……」

中身をこぼしながら、超タウリンのビンが転がっていく。ノエルは思わず手を伸ばしたが、やはり痛みに耐えられないようだ。腕を伸ばすことすらできなかつた。

「構わない。安静に……」

ポチョムは転がつていぐビンを見送つて、ノエルに話しかける。この様子では、一口田はかなり危険だらう。超タウリンによる回

復はあきらめ、ノエルの自然な回復を待つしかない。

だがそれではもどかしい。ポチョムは思わずノエルの傷を舐め出した。

「ごめんね…… ポチョムくん……」

「いい…… 話さなくて……」

「……ごめんね……」

「いいんだ……」

「ごめ……」

「いいんだ！」

「……」

逃げ込んだ先の無人の民家。壁に背中を預けるノエル。

ノエルは痛みのせいか、まるで体を動かそうとしない。

外からはまだ、銃声と喚声が聞こえてくる。だがここだけは、偽りの静寂が支配していた。ポチョムには別世界のように思えた。しかし長くはもたないだろう。

ポチョムはその大きな舌で、ノエルの傷を舐め続ける。ポチョムが静かにノエルの傷口を舐める。黙々と。ただ黙々と。

「……」

ポチョムは一心にノエルの傷を舐める。もちろん魔力を込めている。魔力による回復に比べれば、傷口を舐めることなどたいした効果はないのかもしれない。だがノエルは、身も、心も傷ついている。少しで多く、触れてやらずにはいられない。

外の銃声が大きくなる。悲鳴を伴っていた。ここももう、安全ではないのかもしれない。兵士は民家の中にも踏み込んでくるだろう。この偽りの静寂も、もつすぐ終わりを告げるだろう。

「……」

それでも安心したのか、ノエルがゆっくりと皿をつむった。

「ノエル殿……」

ポチョムは舌を休め、その顔に見入る。ノエルはそのまま、眠りにつきそうだつた。外の銃声はますます大きくなる。ブーツの足音も聞こえる。兵士は近くまできている。

「……」

ノエルは眠つたようだ。張つていた気が、一気に緩んだのだろう。ポチョムはノエルの寝顔に見入る。そのまだあどけなさを残した顔を、脳裏に刻みつけようとする。そして

「……」

覚悟を決めた。ポチョムはその身を翻す。

「ダメよ……」

寝ているうちにと思つたが、ノエルはすぐに目を覚ましたようだ。或はポチョムが身を翻したその物音で、目を覚ましたのかも知れない。もしくはその悪い予感で。

「ポチョムくん……ダメ……いつちやダメ……」

ノエルはポチョムを引き止めようとしてか、その体を掴んだ。だが意識がもうろうとする体では、思つように力が入らないのだろう。からうじて、ポチョムの脇腹の体毛を掴んでいた。腕はおかげ、体中に力が入らないようだ。ポチョムに引かれたその体は前に屈み、力なく頭を垂れてしまう。

「ノエル殿……」

「ダメよ……死ににいくつもり……」

ノエルは顔を上げた。今ここで手を離しては、ポチョムはいつてしまふ。自分に注意を引きつけ、この場から兵士を遠ざける為、囮となりにいつてしまふ。

「……そうそう、欲しがついていたのですな……新しい鎌と鎧……」

ポチョムの体が優しく光つた。その身から真新しい鎌と、鎧が現れる。ノエルが欲しがつていた鎌と鎧。ポチョムが特別に魔力を込めて産み出した、魔法のアイテムだ。

鎌は短い柄に、三日月を思わせる大きく湾曲した刃がついている。手元から半円を描くその湾曲した刃。その先端は、柄の延長線上を

飛び出す形で鋭く伸びている。

そう、先端にいくほど細く、鋭利になるその刀身は、まるで虎がふるう爪を思い起させた。

鎌は木製の長い柄に、黒光りする鍛鉄の頭部がついている。大振りだが片手に余る程ではなく、用途によつて使い分ければ、片手でも両手でも威力を發揮するだろう。

そして無骨だが重厚なその流線形の頭部は、あたかも虎が獲物に剥ぐ牙で作ったかのようだ。

「これがあれば草刈りも、土木作業も楽ですぞ」

微笑んだポチヨムの口中から、白い歯の光がこぼれて見えた。一際大きな上顎の右の歯が一本、その口からなくなっている。外からは見えないが、右前足の爪も一つなくなっていた。

「何と言つても、魔法のマスクット猛獣の力を持つ、鎌と鎌ですからな」

何時の日かくる別れの日。その時の為の餞別のつもりで考えていた。たとえ自分がいなくなつても、自分の分身で少しでも楽に農作業をして欲しい。

その思いから考えていた、魔法の鎌と、魔法の鎌だ。

あやうく渡し損ねるところだったが、ノエルに一度引き止められたお陰で思い出した。

「……何言つてゐるの……」

ノエルは別れのしるしにて、この鎌と鎌をポチヨムが差し出さうとしていることに気づいた。餞別。いや違う。これでは餞別どころではない。

形見と思つて下され

ポチヨムは声に出さずにそつ告げると、顔をノエルの頬に近づけた。そのまま大きく鼻で息を吸い、ノエルの匂いを脳裏に刻み込む。鼻の調子に関係なく、吸える限り大きく息を吸う。

ノエルの周りの空氣とともに、その思い出を胸に納める。息を吸い終わると、一呼吸置いて頬をノエルに押しつける。自分の温もり

と匂いを伝え、感謝と信愛の情をノエルに伝えた。

「楽しかつたですぞ！」

そう告げるとポチョムは、前に向き直る。もう未練はない。ノエルの顔から、ポチョムが離れる。ゆっくりと歩き出す。それだけで、ノエルの指は引きはがされた。

「いやつ…… ポチョムくん！」

必死に手を伸ばすノエルの叫びもむなしく、ポチョムは振り向きもせずにドアに向かう。振り向いてしまっては、ノエルにまだ引き止める希望を持たせてしまう。そんな訳にはいかない。

自らも振り向きたい思いを振り切つて、ポチョムはドアをぐぐる。

「う…… うつ…… うわあ……」

ノエルは手を伸ばす。だが足が動かない。前のめりに倒れてしまふ。

ノエルは慌てて顔を上げた。

だが

「ポチョムくん……」

ポチョムの背中はもう、ドアの向こうに消えていた。

## 一、「血の日曜日」1-1

ポチョムは民家を飛び出した。一息にその場を離れ、通りを駆け出す。

「兵よ！　聞け！」

十分距離をとつたと見たポチョムが、手短な小屋の屋根に登つて吠える。

「先に港で起きた反乱……　その首謀者を搜してはいなかつたか？」

「何？」

兵士が顔を上げる。ポチョムが威嚇するかのように、更に低く唸つた。

「貴様？　手配書の！」

前年に起こつた黒海での反乱騒ぎ。戦艦を奪つた上で、国家への反逆だった。

その首謀者は、一匹の魔獸。

今日の前にいるのは、手配書通りのアムールタイガー。人語を話す獸。兵士を挑発するかのようなその態度。間違いようがない。

反逆者の長にして元貴族　追われる身の、魔法のマスクott猛獸だ。

「降りてこい！　貴様も一度は公に列せられし貴族！　悪あがきは見苦しいと思え！」

士官がポチョムの迫力に、負けじと吠えた。

「ほう……　そのか細い首筋で、よくそれだけの声量が出るものだな……」

「何を……」

士官は思わず首筋に冷たいものを感じる。人間として、か細いと言われるような首をはしていない。むしろ地方から集められた農民出の兵士と違い、職業軍人として日頃から鍛錬を積んでいる。そこの人間と比べても、一回りか二回りは太い喉周りのはずだ。

「一噛みで終わるその首……生意氣を言つよつなら、今すぐくびり落してくれよう！」

ポチヨムはことさら時代がかつた物言いで、残つた左の牙を見せつけた。

続々と兵士がポチヨムの足下に集まつてくる。多くの者が及び腰だ。

虎というだけでも恐怖。シベリアの虎なら、尚恐怖だ。  
本能的な恐怖に兵は怖氣づく。ましてや魔獸だ。恐怖すら感じる。  
そしてその虎が放つ明確な敵意。

一噛みで終わる首を何本並べても、この猛獸の放つ野生の氣に、  
対抗することなどできそうにない。人間など、野生と魔法の前では  
圧倒的な弱者だと思い知らされた。

ポチヨムは集まつてきた兵士を、一人ずつ睨みつける。自分をこ  
とさら印象づけた。

かなわないと一度印象づけてやり、頃合いを見て逃げ出すつもり  
だった。千載一遇の好機と思わせて、浮き足立たせ、なるべく自分  
に引きつける。兵士をこの場から、遠ざける。

ノエルが回復し、逃げる時間を稼ぐ為だ。

ポチヨムは大きく息を吸い込むと、

「いくぞ！」

自分に言い聞かせるように叫び、屋根から兵士達に飛びかかった。

「う……いや……」

ノエルは動かない足で民家の床を這つた。全身に激痛が走る。

「……ツ！」

だが構つてはいられない。自分の浅はかな行いで、大事な人を失  
おうとしている。

「動いて……お願ひ……動いてよ……」

ノエルは肘が擦り剥けて、血塗れになりながら前に進む。だがま

るで進んでいない。

「どうして…… どうしてよ……」

ノエルは後悔に涙する。それでも前に進もうとする。

「助けて……」

ノエルは願う。

「聖母様……」

ノエルは祈る。

「お願い……」

だがノエルの願いは届かない。

「聖母様……」

ノエルの祈りは通じない。

「誰か……」

ノエルの想いは

「 ッ？」

ふとノエルの肘に、何かかが当たる。

「何……」

ビンだった。

これは

ノエルの目がそのビンに釘づけになる。それは先程一口舐めて、咳き込んだ劇薬のビンだ。

一口だけだったが劇的に回復した。だが一口、三口と口にするには、あまりに劇薬に思えた。ポチョムも一口だけしか、舐めるなど言つた。

「ポチョムくん……」

ノエルはポチョムが残してくれた、薬のビンを見つめる。蓋も閉めずに転がしたビンは、中身をして転がっている。

ノエルは痛む体で、ビンを拾い上げた。中身はなくなっていた。全てこぼしてしまっている。

ビン底に僅かに液体が残っていた。

ノエルはビンを逆さにして、その微かな中身を舌の上に落とす。

「ガハッ！」

やはり劇薬だった。一滴垂れただけだったが、むせ返つてしまつ。だがグンと、力が入つた。見る見る体が回復するのが分かる。

「もつと……もつとあれば……」

もつとあれば、もつと回復すればポチョムを追いかけることができる。ノエルはかすむ目で、その僅かな希望にすがろうとする。ノエルは辺りを見回した。ポチョムは一本しか出さなかつた。それは見ていた。だが一片の奇跡を求めて、首を巡らせてしまう。あつた

ノエルはぼやける視界で見つめる。超タウリンが染み込んだ、その泥だらけの

ポチョムは兵士の注意を引きつけては、発砲を避けて通りを逃げ続けた。

「追え！」

士官が叫ぶ。元より四足歩行のポチョムには、追いつけるはずもない。

それでも、ポチョムは時折立ち止まつては振り返り、威嚇する振りをする。振り切つては意味がない。兵士が追いつくのを待つ為に、わざと時間を使う。

「貴様らにやられるワシではない！」

多くの兵士が市民への発砲を止め、ポチョム追跡に加わった。ポチョムの思惑通りだ。

次々と撃ち出される銃弾を、走りながらポチョムが避ける。追走しながらの狙いが定かではない銃撃だが、時折ポチョムの皮膚をかすめる。

「おのれ！」

士官の一人が、ポチョムの前に立ち塞がつた。左の掌を差し向けている。

「魔法か？」

ポチョムが魔力を己の鼻先に展開する。瞬時遅れて紅蓮の炎が、ポチョムに襲いかかつた。

「障壁魔法？　さすがと言つたところか！　マスコット猛獸！」

士官は炎がポチョムの魔法の障壁で防がれたと見るや、腰のサーベルに手をかけた。抜き放つた勢いのまま、ポチョムに斬りかかる。「斬れぬよ！　そんな、なまくらでは！」

ポチョムの爪が、サーベルを弾く。左から右にふるつた、左前足の爪だ。そのまま右前足を返す刀で士官にふるいかけて、その鼻先で止めた。

いつもなら伸び出るはずの爪が、一本なかつたからだ。その違和感で出し損ね、そのまま攻撃を止めてしまう。

このまま勢いに任せて右前足をふるつていれば、土官の命を奪つていただろう。だがポチョムはためらつてしまつた。

「ノエル殿……」

ノエルならそんなことは望みはしない。そう思つたからだ。

ノエルは立ち上がりがない。腕は上半身すら、支えられない。這つていき、頬を地面に着けて舌を出し、顔を傾けた。

ノエルは泥だらけの 床を舐める。

超タウリンと混じり、泥と化した床のホコリを舐める。ジヤリッという音がした。

床を削るように舐める。

舌が痛い。泥の味はひどく不味い。

そして薬草とも言つべき、超タウリンがノエルを襲つ。

「グエツ…… グ…… ゲボ……」

すぐに吐いてしまつた。ノエルは激しく身を捩る。

「ぐ……」

それでもノエルは、もう一度舌を出す。

己の反吐が混じつてしまつた、泥の床を舐める。

「ガアアアア……」

やはり吐きそうだつた。

それでも喉元まで迫り上がつたものを、ノエルは押し戻す。超タウリンが更に負担をかける。

「ゴキ……」

折れた骨が、無理矢理繋がつた。

「 ツ！」

その物理的な衝撃が痛い。

「 グアツ……」

しばらくして、やつと声が出る。折れた時以上の痛みだ。

床を舐める。薬と涙と涎に塗れる床を舐める。

「ガガガガガ……」

歯が鳴る。無自覚に鳴る。止まらない。

皮膚が無理に繋がるつとする。

何とも言えないかゆみが、皮膚の上を這い回る。

幾万ものイトミミズが「ぐく」めくよくな、この匂の皮膚をかきむしりたい。

「グツ……」

歯を食いしばって、その欲求を耐える。

足りない血を送り出す、骨髓が焼けるように熱い。

全身の痛みを受けつける頭は、内側から割れるよつだ。

「　ツ！　ツ！　ツ！」

悲鳴はまたもや、声にならない。

かろうじて出せるのは、『ヒコウ』という乾いた音だけだ。

だが一番痛いのは

まぶたにポチョムの背中が浮かぶ。

ポチョムくん

ポチョムにもらつた鎌と鎧を、ノエルは力の限り握り締める。

ノエルは床に歯を立て、かじりついた。

戻ってきた力で、周囲の泥をかき集める。一気に口に押し入れた。

「　ツ！」

超タウリンがノエルの中で爆ぜる。

ノエルは涙と泥だらけの顔と姿で

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアツ！」

立ち上がった。

# 一、血の田羅日一三

「いしゃくな！」

サーベルを弾かれた士官が、目の前を通り過ぎようとするポチヨムに、尚も左手を向ける。

「グッ……」

障壁の展開が間に合わなかつたポチヨムは、左後ろ足を士官の炎にあぶられた。

「おおっ！」

「いけるぞ！」

初めてまともに当たつた攻撃。その炎に兵士の間から歓声が上がる。

勢いよく兵士達。

傷ついた足をかばいながら、駆けるポチヨム。思った以上のダメージだ。力が入らない。

「まずいか……」

ポチヨムが顔を歪める。兵士の発砲。数発避け損ねた。肩に当たった弾は、たいしたことはない。分厚い筋肉があるからだ。だが、脇腹に入った一発は、

「グッ……」

ポチヨムの意識を一瞬遠ざける。

「まだだつ！」

ポチヨムが駆ける。兵士が追う。待ち構える。その数は増えるばかりだ。発砲。肩に……脚に……腰に……弾が命中する。避けたつもりの弾が、避けられない。

「まだだ！ まだやられはせん！」

ポチヨムが飛ぶ。力を入れる度に、四肢が悲鳴を上げる。着地する度に、臓腑にめり込んだ弾丸が爆れる。視界が狭くなる。

「まだやられる訳には……」

ポチヨムの両脇を、氷と炎が同時に襲つた。魔法による攻撃だ。避けられない。右前足が焼かれ、左目の上を小型のブリザードが襲つた。

「この程度！」

氷の魔法を放ち目の前に立ち塞がる兵士。その体を突き飛ばし、ポチヨムは駆ける。炎の魔法を使った兵士が、更に追い打ちをかける。

「ツ！」

後ろからの炎に、一瞬ポチヨムの全身が包まれる。もはや避けることすらままならない。真っ直ぐ走るだけで、精一杯だ。

もう少し…… 後少しだけ

ポチヨムは最後の力を振り絞つて前に駆けた。ただひたすらに、ノエルの姿を心に浮かべて。

ノエルは歩き出す。だが自分の身に何が起こっているのか、よく分からぬ。

ポチヨムがくれた鎌と鎧に導かれるように歩く。周りの景色が、飛ぶように流れる。ポチヨムの背中に乗った時よりも、周りの景色が早く流れる。その代わりに入々の動きはひどく遅い。

先程から何人かの兵士が、近づいてきては弾き飛ばされている。あんなに緩慢な動きなら、当たり前だ。ノエルはそう思う。

実際魔法の鎌と鎧を少しふるうだけで、兵士達は弾き飛ばされた。力がみなぎつているのは、超タウリンのせいだろうか？ いくべきところが分かるのは、鎌と鎧のお陰だろうか？ では、この使命感は何処からくるのだろうか？

ノエルには分からぬ。

ノエルは民家の壁に、鎌と鎧をふるう。鎌で壁に傷を入れ、鎧で打ち碎いた。あっけなく壁が崩れる。ノエルは幾つかの壁を砕き、一直線に鎌と鎧が導く先へと向かう。

この向こうだ

ノエルには何故かそれが分かつた。だが何故それが分かるのか、ノエルには分からぬ。

そして何故教わったことのない呪文が、脳裏に浮かぶのか分からぬ。

だがノエルは信じる。これは自分に与えられた使命なのだと。

「聖母様……」

ノエルは祈りの言葉とともに、そして魂のままに、心に浮かんだその呪文を唱えた。

「マ」

## 一、血の日曜日 1-4

ポチヨムは壁際に追い詰められた。兵士による発砲。ポチヨムは飛び上がって、銃弾を避ける。逃げた先も壁。周りを取り巻く兵士達。もはや突破できない。多くの兵を引きつけた。ノエルのいた場所から、少しでも多くの兵を遠ざけた。

「後は……」

ポチヨムが建物の脇道に逃げ込む。だがそこは袋小路。いき止まりだつた。

「ちょうどいい……」後は、人目のつかないところで死ぬだけだ  
その思いを胸に、ポチヨムが振り返る。

『戦漢』の一いつ名で呼ばれた獣が、己の命の使い道を悟る。

ポチヨムを追い詰めたと見た兵士達が、袋小路に雪崩れ込み、立て膝で銃を構えた。

「悪くない…… ですか……」

士官が発砲の号令をかけようと、手を振り上げた。

ポチヨムにはそれは、かなりゆつくりとした動きに見えた。

「ここで死ねば…… ノエル殿の目にはとまるまい……」

ノエルの顔を思い出す。マリーの顔を思い出す。三人で囮んだ夕食を思い出す。

「皆…… 今いく……」

反乱の仲間達を思い出す。彼らに比べれば自分は幸せ者だ。ノエルに出会ったあの日。本当ならあの日に死んでいた。いや反乱の時に死んでもおかしくはなかつた。あの日から今日まで、魔法のマスコット猛獸には過ぎた幸運を味わつた。親もない自分が家族を持てたのだ。

兵士の後ろで、士官が手を擧げる。一斉発射の合図。後は号令とともに、振り下ろすだけ。士官が大きく口を開いた。

「充分だ……」

ポチヨムは覚悟を決め、目をつむった。

その時

「マルクス！ エンゲルス！ ニシンテルン！」

その声に全員の動きが止まった。

ポチヨム。ポチヨムを追い詰めた兵士。遠巻きに逃げ惑う市民。その場にいた全ての人間が、その透き通るよつた少女の声に耳を奪われた。

「世界同時に革命よ！」

十字の閃光が壁に走る。

兵士の横少し後ろの壁に、十字の傷が一瞬にして入った。レンガの壁にだ。十字の細い隙間が開き、そこから光が溢れ出る。十字の光だ。

瞬時遅れて、その光とともにレンガが弾け飛んだ。

「魔法同志！ ノミユツ娘！ ノミユン！」

レンガが碎け散った壁から出てきたのは、軍服と軍帽の少女だった。いや軍服をモチーフにしたツーピースのドレスを身にまとった可憐な少女だった。

長い髪を編み上げ、その軍帽に押し込んでいた。

その左手には鎌。右手には鎧を持っている。

軍服は赤い。真っ赤に染め抜かれている。燃えるように赤い軍服は、まさに少女の勇気を表すかのようだ。そう、国旗にも染められている、勇気を象徴するかのよつた赤だった。

兵士が上半身だけで振り返る。そして誰もがその姿に声を奪われた。一言も発せられない。

「そうよー 私は護民官！」  
「グラキュース

ゆつくりと少女は瓦礫を乗り越えて、袋小路に進み出る。凜とした姿勢で、兵士達の後ろに立つた。少女は鎌と鎧を左手に持ち替え、

「己の腰にその手を当てる。

兵士達は上半身を後ろに捻つたまま、目を奪われる。目が少女に釘づけになつたまま、全く瞳が動かせない。

「君のハートに」

少女は兵士達に、そしてその奥のポチヨムに、右手を差し出した。ポチヨムも含め十数人はいるのに、全員が自分に手を差し伸べられたのだと何故か思った。

「チエ」

『チエ』は異国の言葉で、『やあ』や『ねえ君』等の呼びかけの言葉だ。

少女はその呼びかけの言葉とともに、自分の右手を優雅に動かした。肘を上げ、掌を前に向けながら、顔の前まで持つてきた。掌を大きく広げ、小指の先までピンと綺麗に、すべての指が伸ばされている。顔の大部分が掌で隠されてしまった。だがかえつて指の間からぞく眼差しが、魅力的な光を放つ。

大きく開いた薬指と小指の間から、左の瞳で少女は前を見つめる。少女が自分だけを密かに見つめている。その仕草に誰もがそう信じた。『ねえ君』と、自分だけに呼びかけているのだと信じた。そして兵士達は思わず、少女に向き直る。

「ゲバ」

少女は一転して、腕を広げる。右手を後ろに伸ばし、掌を上に向けて、大きく胸を張つた。

一度は隠した顔があらわになる。一度隠されたが故に、誰もがもう一度見たい。そう切望せざるを得ない美貌が、全ての視線を受け止める。

その少女の切れ長の瞳はつむられていた。武器を持つ兵士を前にして、無防備にして、無警戒。誰がきても構わない。誰でも受け入れる。誰であつても許しをとれる。それがたとえ銃殺の為に、自分に銃口を向ける兵士であつても私は愛をとれる。そう言つてゐるかのようだ。

まるでイコンの中の聖母のよつな莊厳さと寛容さ  
それでいて、革命に命を捧げた英雄のような氣高さと誇り  
それが、その万人に向けて開かれた胸から、溢れ出ている。  
兵士達は我知らずに一步、前に出る。心を奪われる。次々と聖母  
の名を口にし、無意識に銃口を下ろしてしまつ。

「ラ！」

少女はその言葉とともに、一転して右手で敬礼した。少女の目が  
一気に見開かれる。

その最後の一言が

少女の全てを射抜く凜々しい視線が  
兵士の、そしてポチョムの心を貫いた。それは魂をも貫く声と眼  
差しだつた。

「何だ……」

ポチヨムは呆然と呟く。今自分は何を見ているのだと、何が起こつているのだと、目の前の現実を必死に把握しようとする。だが理解できない。ただただ驚愕に目を見開く。

最初に動いたのは、徵用された貧農出の兵士だった。崩れるように膝を折る。一瞬にして耳も、声も、目も奪われた。そして今や、心を奪われ、魂すら奪われている。

若い兵士が次々と膝を着く。中にはまるで聖母に祈るかのように、手を合わせる者もいる。

「何をしている！」

隣の兵士が膝を着く鈍い音に、やつと我に返った士官が叫んだ。叫んで己を鼓舞しなければ、訓練を受けた士官すら、この場で戦闘を放棄してしまいそうなかもしない。

それ程の神々しさを、突然現れた少女は放っていた。

「立て！ 立て！ 立つて、戦え！ 皇帝陛下の兵であるぞ！ 我らは！」

士官は自分の銃で、兵士達を叩きつけた。兵士達はお互いの顔を見ている。それはまるで、皇帝と田の前の少女とを、同列に比べているかのようだ。

「撃たんか！」

「う……うわあつ！」

士官に背中を叩かれた兵士が一人、震えながら銃口を上げた。

「あぶないっ！」

ポチヨムが叫ぶ。

「ふふつ……」

「ミコノと名乗った軍服の少女は、小さく微笑むと前に駆けた。あとと、兵士が思つ間に、ミコノは銃口を上げた兵士の懷に入

り込んでいる。右手を下から上にふるつた。『ノモン』の鎧に弾かれて、兵士の銃が宙を舞う。

「おのれ！」

士官は振り絞るような声を上げ、銃口を『ノモン』に向ける。力と勇気も振り絞つていいかのようだ。力の入り過ぎた銃口が、『ノモン』ではなくその横の兵士の方を向いてしまっている。

「食らえ！」

士官は自分の標準が、全くぶれてしまっていることに気がつかない。目の前の少女の放つ畏怖の気に負けてしまっている。一刻も早く、引き金を引いてしまう。それしか考えられなくなつてしまつた。フレッシュヤーに押しつぶされて、田までつむつてしまつた。

弾丸が射ち出された。弾丸は、やはり『ノモン』ではなく兵士に向かつて飛んだ。

「ダメよ！」

「ノッ」

ノエル殿と言いかけて、ポチヨムは慌てて口をつぐむ。本名を危うく叫びかけてしまつたからだ。そして何より、少女が一瞬で、士官の銃口と兵士の間に立ち塞がつていたからだ。

『ノモン』は左右の鎌と鎧をふるう。それだけで飛び出した弾丸を弾き飛ばした。

「な……」

あまりの光景に、ポチヨムは声を失う。それは周りを固めた兵も同じだった。

皆が息を呑む中、魔法同志『ノモン』娘『ノモン』こと フランソワ・ノエル・バブーフは、

「退きなさい！」

凛としてそう命じた。

その後、軍は総崩れした。

反乱の手配者を追い詰めていたはずの部隊が、袋小路から雪崩を打つたように走り出でくる。そのもつれるような足取りに、すぐにそれは敗走だと知れた。

事情の分からぬ他の部隊の士官が、逃げ出した兵士をつかまえて詰問する。兵士の目は全く焦点が合っていない。まともな返事すら返つてこない。ただ一言聞き取れたのは『聖母様が……』という、意味不明の言葉だけだった。

「クソッ！」

詰問していた士官は兵士を突き飛ばすと、注意深く銃口を袋小路の入り口に向けた。

壁の崩れる音と、銃声。確かに何かあつたのは、聞こえてきた音だけでも分かつた。銃声の前に、何か閃光のようなものが光ったことも、離れていた部隊からでも分かつた。

だが武装した兵士達が、追い詰めた相手に腰を抜かさんばかりに逃げ出してくる。その理由が分からぬ。

「革命論者か？」

武装した兵士に、一定以上の脅威を与える存在など、それしか考えられない。だが仮に革命論者がいたとしても、その数は多くはないはず。兵士の脅威となるようなことはないはずだ。

「出てこい！」

その声に応えるように路地裏から現れたのは、手負いのアムールタイガーと一人の少女

赤く染められた軍服のようなドレスを着た年端もないその少女が、鋭い視線を周囲に投げつける。そして脇に控えたその手負いの虎の傷は、瞬く間に塞がっていく。

「ノエル殿……」

ポチョムは思わず呟く。魔法同志コミニュつ娘コミニコンとなつたノエルは、敵を圧倒する力を見せつけた上に、ポチョムの魔力と体力すら回復してみせた。二人はその魔力で、ポチョムの傷を癒す。応急処置だが、ポチョムは十分動けるまで回復した。

「しつ……今は『ミコノ』よ。手分けして兵を追い払いましょ！」  
『ミコノ』が鎌と鎧を構えた。

「しかし……」

「言つたでしょ。今の私は『ミコノ』だつて。今の私は魔法同志なの。  
話は市民を逃がしてから」

『ミコノ』がポチムに微笑む。これから戦いに臨むと言つのに、  
柔らかな笑みだった。

「同志ポチム！」

『ミコノ』は凛とした声で、呼びかける。その迷いのない呼びかけ  
に、

「同志『ミコノ』！」

ポチムは堂とした声で、思わず応えてしまつ。

魔法同志『ミコノ』娘『ミコノ』。

魔法のマスク・猛獣 戰漢ポチムくん。

「いくわよ！」

「オウッ！」

二人はお互いに声をかけ合つて、群がる兵士に向かつて駆け出しだ。

発砲する軍隊。逃げ惑つ市民。その間を駆ける「ミコノ」とポチヨム。

撃ち出される銃弾を、「ミコノ」が弾き返す。驚く兵士達に、ポチヨムが飛びかかる。

軍は崩れ出した。その隙に市民達が逃げ出す。

「同志ポチヨム！ 市民を！」

「ミコノが叫ぶ。兵士からの銃弾を、次々と弾き返す。

「分かつた！ 同志ミコノ！」

ポチヨムが応える。兵士を次々と、魔力と体躯で投げ飛ばす。「ミコノ」が鎌と鎧をふるう度に、兵士達が倒れていく。皆氣を失つていた。魔力だけで、相手を失神させている。

兵士の倒れ方も、まるで何かに抱きかかえられているかのようだ。「ミコノ」が怪我をさせないように、魔法の障壁を地面との間に展開している。兵士は傷一つ追わず、倒されていく。

ポチヨムは時間が経つごとに、体が軽くなるようだつた。「ミコノ」の放つ魔力が、ポチヨムの体に氣力と体力を補充する。「これ程とは……」

ポチヨムは「ミコノ」を見る。

ノエルの身に何かが起こつた。それは分かる。田を見張るのは、外見の変身以上の変化。そう、その魔力。その力。そして何より、その身から溢れ出ている神々しいまでの気迫。

「ミコノ」は舞つよひに、鎌と鎧をふるひ。踊るよひに兵士の間を駆ける。

兵士はなす術がない。何もできないうちに、倒されしていく。

「まだ兵を退かせないつもり……」

「ミコノ」は小さく呟いた。兵士達はきりがない。突如現れた謎の少女と虎。その圧倒的な力。市民に向けていた兵士の多くを、士官

は一人に差し向けていた。

今や市民はほゞ、この場から逃げ出している。『ミコン達は目的を達した。自分達も撤退を考えなくてはならない。だが

「同志『ミコン！ そろそろ我らも退くぞ！」

「そうね……でも！」

『ミコンは顔を上げると、冬の宮を睨みつける。そこにはいるのは魔法皇帝。この国の頂点。

「何を？」

「同志ポチヨムは先に退いて……」

この惨事を、この流血をどう思っているのか。魔法皇帝はどんな顔をしているのか。その顔を確かめたい。『ミコンは鎌と鎧を握り締め、そつ思つ。

「同志『ミコン！ 待て！ 魔法皇帝は』」

魔法皇帝の力は絶大。この冬の帝国で、全ての魔力の頂点に立っている絶対者だ。『ミコンといえども一人で飛び込もうなど無謀だ。それはかつて仕えたポチヨムが一番よく知っている。

「いくわ！」

「同志『ミコン！』

「大丈夫！ 顔を拭むだけよ！ 後は任せたわ！」

ポチヨムの制止を振り切つて、『ミコンは大地を蹴つた。

「前線との連絡は？ まだつかんのか！」

魔法皇帝 『ミライ一世は、苛立を隠せなかつた。

『ミコンは冬の宮の奥深く。司令所は士官の配慮により、冬の宮の奥の迎賓室に設けられている。それでも銃声は聞こえてくる。遠い分、実感が湧きにくい。小さく、乾いた音だ。だが確かに銃声だ。誰かが撃たれている音だ。

そんなことは望んでいない。今すぐ止めなくてはならない。だが

「銃を納めよ！ こんな簡単な命令が、何故伝わらん！」「

彼の言葉は、前線に伝わらない。

サーベルを腰に差した軍服で、魔法皇帝は焦燥感とともに歩き回る。

臨時に設けさせた司令所に、魔法皇帝のブーツが苛立たし気な足音を響き渡らせた。

「市民を巻き込んで、何が革命だ…… 何が理想だ！ 革命論者め！」過激派め！」

魔法皇帝は吐き捨てる。自身の思念も、何者かによつて遮られている。おそらく革命論者の仕業だらう。直接の伝令は、前線の混戦で上手くいかない。

いたずらに時間だけが過ぎる。この間にも、市民が死んでいく。

「もう一度いけ！ この馬鹿げた騒動を、終わらせろ！」

魔法皇帝が士官を叱りつける。怒鳴られた士官は、慌てて敬礼すると司令所を飛び出した。

「……」

飛び出し、廊下を走り去る士官。その背中を廊下の反対側で、何者かが息を殺して見送った。

「何者だ？」

誰よりも早く、その侵入者に気がついたのは、魔法皇帝自身だった。廊下の陰に向かつて、力強く詰問する。司令所の中の士官と衛兵達が、一斉に廊下に振り向いた。

現れたのは赤い軍服を模したツーピースのドレスの少女だ。

「魔法同志「ミコツ娘」ミコン」

陰から現れたコミニコンは、真っ直ぐ魔法皇帝を見つめる。冬の帝国の皇帝。この混乱の最大の責任者。魔力と国力の象徴。魔法皇帝 マジカル・ソアーリ 絶対的な権威だ。

「ソアーリ！ お下がり下さい…」

「革命論者か？」

魔法皇帝の周りを、士官と衛兵が即座に固める。

「違つわ」

「ミコーンは答える。自分は革命論者ではない。

「ただの市民よ」

そう、市民だ。ミコーンは思い出す。デモに参加した沢山の市民達。あの人達の思い。祈り。願い。そして痛み。怒り。嘆きそれを背負つた市民の代表だ。

「市民？ ただの賊か？ そんな訳はなかろう！」

士官の一人がそう決めつけると、誰よりも前に出る。

凛とした目の前の少女。混乱に乘じた、ただの賊な訳がない。格闘をするには広いとは言えないこの部屋で、油断なく士官はサーベルを身構える。その切つ先が真っ直ぐミコーンを狙う。

「そうよ。ただの市民じゃないわ。私は魔法同志ミコーンの娘ミコーンよ！」

魔法同志ミコーンの娘ミコーンは、魔法の鎌と鎧を悠然と構える。士官に向けて構えつつも、田は真っ直ぐ魔法皇帝を見つめていた。そのことに士官が気づく。

「貴様の相手はこちらだ！」

士官のサーベルは、正確にミコーンの心臓を狙う。寸分の狂いもない。だが

「遅い……」

そう。狙いの正確性の割には少し遅い。ミコーンは少しだけ鎌を動かす。士官のサーベルは、それだけで斬られた。

「この……」

「終わり……」

士官が次の一撃を繰り出そうとする。その為の一瞬の呼吸。その呼吸が終わる前に、ミコーンの鎧が士官の肩に食い込んだ。

「ぐ……」

その重い一撃に、士官は氣を失う。がくりとその身から力が抜けた。

その隙にできるであらう、一瞬の好機に反応したのは若い衛兵だ。

「……」

倒れ始めた士官の陰から、無言のままサーべルを突き出す。下から上へ。鋭角に。当たる寸前まで士官の体に隠れる軌道を選び、相手には見えない弧を描いて衛兵の刃がコミコンに迫る。

「く……」

コミコンは反応が遅れた。皇帝直属の衛兵となると、やはり腕に覚えがあるのだろう。鎌で防ごうにも、もう間に合わない。鎌を握つたコミコンの左脇腹の下に、鈍く光る刃が迫る。

「ハツ！」

コミコンは左足を、半歩後ろに退く。軍服をかすめるサーべル。流石のコミコンも冷や汗が出た。軍服とサーべルの間には、僅かな隙間だけしかない。

その幸運を聖母に感謝する間もなく、コミコンは鎌の柄を逆さに持ち直した。

「この！」

最初の突きが避けられたと見るや、そつ吐き捨てて衛兵は刃を水平に向ける。

「ヤツ！」

気合いとともに衛兵は、刃を引いた。サーべルの戻し際に、脇腹を僅かでも切り裂こうとする。だがその狙いは阻まれた。刃は鎌の柄に防がれる。逆さまに持ち替えたコミコンの鎌の柄が、衛兵の攻撃をしのぐ。僅かに間に合つた、木製の柄の先。それが鉄の刃を防ぐ。

「魔法の鎌か？」

衛兵が驚愕する。サーべルを防ぐ木製の柄。魔法のアイテムとか考えられない。

「……そうよ！ そして魔法の鎌よ！」

コミコンの鎌が唸りを上げて、衛兵のサーべルに襲いかかる。

「……」

魔法皇帝はその様子を、静かに見ていた。

皮肉だな

魔法皇帝は心中でそつ啖く。

前線への攻撃中止命令が伝わらない。そして今まで年端もいかない少女と、衛兵が目の前で戦っている。誰がこれを望んでいりとうのだろう。誰も望んではいない。

それでも戦いが起ころんでいる。魔法皇帝は現実を見せつけられた気分だった。

「控えよ！」

魔法皇帝はそう命じて、前に出る。奮戦していた若い衛兵が、丁度サーべルを鎌で叩き落とされていた。士官と衛兵が、一斉に直立する。魔法皇帝の前が一瞬にして空いた。

「ノリコーンと戦っていた衛兵すら、相手の間合いに入つたまま無防備に直立する。

「……」

もちらんノリコーンは無防備な相手など狙わない。あらためて得物を構え、魔法皇帝に向ける。

「ノリコーンとやら……」

魔法皇帝は前に出る。冬の帝国の絶対権威が、臣下を脇に控えさせ、自らの足で市民の前に立つ。鋭い視線が、ノリコーンの瞳を射抜いた。

「魔法皇帝……」

ノリコーンは息を呑む。魔法皇帝。その気迫。そのすじみ。その威厳。無意識に一步下がりそうになり、ノリコーンはそのことに驚く。

「速度の鎌に、威力の鎌か…… いい得物だ」

「何を……」

褒められるとは、夢にも思わなかつたのだろう。ノリコーンは思わず呟く。

「だが左手に鎌では、威力が足りまい……」

「な……」

「そして片手に鎌では、狙いが甘くなる……」

「…………」

魔法皇帝は「!!」の攻撃を見抜く。その慧眼に、「!!」はやはり気圧される。

「…………」「……くつ……」

だが下がる訳にはいかない。だから「!!」はあえて前に出る。それぐらいしないと、気迫に負ける。押し戻される。気圧されてしまいと、「!!」は前に出る。

「マジカル・ツアーリー！ 覚悟！」

そして「!!」は気迫に負けた。押し退けなくては、押しつぶされる。その焦りが、短絡な行動を起こさせた。魔法皇帝は抜刀するしていいない。

その魔法皇帝に、「!!」は鎌を振り下ろした。

「いい腕だ……」「……」

魔法皇帝は軽く左手を掲げる。それだけで、「!!」の鎌は防がれる。間を空けず繰り出した鎌の一撃も、見えない障壁に難なく弾かれた。

魔法皇帝が襲われている。それでも脇に控えた、兵士達は動かない。皇帝の命令を守る為、脇に控え続ける。

何故だと、魔法皇帝は自問する。

皇帝の命令を遵守する、鍛えられた兵士達。ただの市民を名乗り、絶対者にすら立ち向かう少女。これだけすばらしい国民がいて、冬の帝国は何故混乱の中にいるのか？

魔法皇帝はそう思わずるを得なかつた。

「!!」

「!!」は内心の焦りを自覚する。

魔法皇帝は無傷。兵士は動こうともしない。魔法皇帝が本気を出せば、いや兵士が動き出しえすれば、コミコンはあつという間に窮地に立たされるだろう。

そのことを分かつていながら、魔法皇帝はコミコンの攻撃を甘んじて受けている。受けて立たれている。そう、コミコンの力は、まるで魔法皇帝に通じていない。

「く……」

コミコンの鎌は届かない。コミコンの鎧は当たらぬ。繰り出す威力を増し、角度を変えても、その前で弾き返される。魔法皇帝に一撃を入れる前に、その障壁を破らなくてはならない。

「……」

コミコンは目を凝らす。淡い光が魔法皇帝の前に展開されている。同心円を描く光の輪だ。

コミコンは目測を、障壁に切り替えた。とつとん鎌を腰のベルトに差し、鎧を両手で構える。

「ダメッ！」

コミコンが裂帛の気合とともに、鎧を振り下ろす。狙うは障壁の同心円　その中心。

その狙い通りに鎧が振り下ろされる。そこしかないという、障壁の中心。ただ一点にだ。

「何！」

魔法皇帝は思わず声を上げる。障壁の実体を見破り、ましてやその中心を寸分の狂いもなく打ち抜く。その技量。鎧の先端に集められた魔力も、見事としか言いようがない。

障壁が音を立てて砕け散った。

「これで！」

砕けた障壁が床に落ちくる前に、コミコンは前に出る。ベルトから鎧を抜き放ち、その勢いのまま魔法皇帝の右脇を狙う。

「ぬっ！」

魔法皇帝はついに抜刀した。だが間に合わない。左の腰から抜き

放ったサーべルは、構え直すには遅過ぎた。しかし

「 ッ！」

コミコンは目を見張る。完全にとらえたと思っていた、魔法皇帝の右脇。サーべルは間に合わない。そのはずだつた。

だが魔法皇帝のサーべルは、抜かれたままの勢いで、コミコンの鎌を柄尻で迎え撃っていた。コミコンの鎌の先が、魔法皇帝のサーべルの柄に僅かにめり込む。防がれる。

「 この！」

コミコンは更に一步前に出る。前に出る勢いのまま、右手の鎌をふるひ。

「 食らえ！ 『 鎌と鎧の挟撃！』」

左手の鎌はそのままに、右手の鎧で魔法皇帝の左脇を狙う。魔法皇帝とは、鎌とサーべルでお互いが釘づけにされている。大振りになりがちな鎧の攻撃でも、これなら確実に相手をとらえることがで

きるだろ？

「 陛下！」

流石の家臣も思わず、身構えようとする。

「 ハツ！」

魔法皇帝は気合いとともに、サーべルに力を入れた。鎌に柄を抑えられたサーべルは、僅かにしか動かない。それでも刃の角度が変わると、その切つ先は鎧の攻撃を正面から迎え撃つた。

ガンッ！

と、互いの手に響く鈍い衝撃。鎧の面の打撃を、サーべルの点の切つ先が押えていた。

「 うひたえるではない！」

力に負け、たわみ、歪む魔法皇帝のサーべル。それでもコミコンの鎧を、すんでのこりで押し止める。魔法皇帝は臣下に一喝し、コミコンの挟撃をサーべル一本で耐え抜いた。

「 ッ！」

「 伊達に魔法皇帝は名乗つておらんわ！」

驚愕するコミコニに、魔法皇帝が左手を向ける。かざされた左の掌から、不可視な力が放出された。

「なつ？」

「コミコニの体を急激な浮遊感が襲う。一瞬何が起こったのかコミニコニには分からぬ。歪んだサーべルが床に落ちた。

「ガツ！」

「コミニコニは天井に打ちつけられた。悲鳴が漏れる。その余りの勢いに、身構えることすらできなかつた。一瞬の後、重力に負けて、コミニコニの体が落ち始める。

だが魔法皇帝の魔力は、まだコミニコニをとらえたままだつた。

「 ッ！」

今度も何が起こつたのか分からぬ。コミニコニは魔力で水平に一度振り回され、壁に向かつて投げ飛ばされた。己の身に何が起こつたのか分かつたのは、眼前に壁が迫つたその時だつた。

「このつ！」

激突　その寸前。とつさに身を屈め、コミニコニは身を丸くする。コミニコニはそのまま放たれた独楽のように、空中で勢によく回転した。

魔力のありつたけを、鎌に集中する。鎌から放たれた魔力は、回転の度に放たれ、壁に次々と切り傷をつけた。

「ハツ！」

氣合いとともに身を拡げるコミニコニ。鎌の柄を両手で持ち直し最後の回転で壁にふるつた。

「何と……」

魔法皇帝は思わず唸る。

解き放たれた魔力の激突とともに、砕け散る壁面。そのコミニコニのとつさの機転と魔力に、この国の魔力の頂点に立つ者が思わず感歎の声を漏らした。

ここは冬の宮。その最奥の司令所。壁は外壁。その向こうは、もう外だ。

「…………」

「…………」の…………

「ミコーンは瓦礫とともに、穴から空中に投げ出される。陽がやっと傾き始めていた。緯度の高い、冬の帝国の首都サンクトペテルブルク。その長い冬の一日が、やっと暮れ始めていた。

ミコーンは灯りの漏れた、自らが壊した壁面を空中で睨みつける。

魔法皇帝の姿は見えない。一撃も届かず、ミコーンは魔法皇帝から逃げ出した。

「完敗だわ…………」

冬の宮の裏　ネヴァ川の冷たい水面に落ちながら、ミコーンは一人歎きしりをした。

### III、アナスタシア・パリハカナ・ロマンヴァア 1

マリーはノエルを抱き締めた。

「……」

生きて家に帰ってきた娘。ただただ黙つて抱き締めてやることしかできない。

吹雪く外の天気よりも、もつとひどいものを見てきたであろう娘。せめて我が家温もりをと、マリーはノエルを強く抱き締める。

「じめんなさい……」

ノエルはマリーに身を任せ、その胸に顔を埋める。心配をかけさせた母。怪我も服も魔法でなおしたが、やはり顔に出たのだらう。

「……」

ポチョムは音を立てないようにと、静かに家の床にお腹を落とす。邪魔にならないようにと、親子の喜び合ひ姿を黙つて見つめた。私にも、よく分からぬの

「ミコンのことを聞いただすポチョムに、ノエルはそう言つた。一人はサンクトペテルブルクの外で落ち合つた。ノエルは元の姿に戻つていた。

まだ煙を上げる首都を遠くに見ながら、一人は話し出す。

暴動は下火になり、兵は秩序を取り戻し始めていた。一人にできることは、もうこれ以上ないだろう。目立つポチョムのことを考えると、早めに脱出した方がいい。

一人はそう判断すると、家に向かつて歩き出した。

超タウリン…… 魔法の鎌と鎧…… 聖母への祈り…… ノエルの才能…… 謎の呪文

抱き合う親子を見つめながら、ポチョムはあらためて考える。

何がノエルに力を与えたのか？ ノエルの魔法同志への変身の原因は？ 力の源は？

帰り道でそのことばかり考えるポチョム。

そのポチョムにノエルは言つ。

問題は変身の原因じゃないわ…… その使命以前を見据えて言うノエル。その横顔。その視線。随分とポチョムには大人びて見えた。

使命

その言葉とともに、ポチョムは親子を見る。微笑み合う親子。互いを気遣い合う、優しい親子だ。娘が暴動で瀕死の重傷を負つなど、あつてはならない親子だ。

使命とはなんだ

ポチョムはもどかしい。あれだけ危険な目に遭つて、まだノエルは使命などと口にする。

十五の少女が背負わなくては、ならないものなのか

ポチョムは自問する。ノエルはまた、戦いに身を投じるかもしれない。使命などと口にしている以上、そのことは考えなくてはならない。戦いに出るつもりなら、思いとどまらせなくてはならない。戦いの悲惨さは、ポチョム自身がよく知っているつもりだった。

「ポチョムさん。ありがとうね……」

不意にマリーがポチョムに振り返った。

マリーの皿の端に光るものに今更ながら驚かされ、「あ、いや…… その……」

ポチョムは色々と言いつぶんでしまった。

冬の帝国は揺れていた。かつてなく揺さぶられていた。

今までは、どんなに揺れても一応の静寂は取り戻していた。

国を揺さぶるうとする革命論者。押さえつける帝国。

不満を口にする市民も、革命論者の押さえつけに国が成功すると、一度は落ち着きを取り戻す。どんなに国が揺れようと、やはり魔法皇帝の権威は絶対だつた。

皇帝あつての国。帝国だ。自分達のよつて立つといひま、やはり

帝国臣民であることだ。

しかし帝国は教会に発砲した。そしてガポン司祭は、その命すら落とした。皇帝はもう、聖教会の守護者たり得ない。そのことが人々の心を、魔法皇帝から引き離し始めた。

そして首都に瞬く間に広がった、ある少女の噂  
人々はその少女のことを、口々に噂する。少女のことを、皆が声をひそめて話し合つ。

帝国は聖教会の守護者たる使命を放棄した。そしてその時現れたのは、一人の少女だった。

暴動の中、多くの者をその魔法で癒した少女。暴挙の中、多くの兵をその魔力で退けた少女。

市民は皆、あの混乱の中では顔もよく覚えていない。  
だが癒しと戦いの少女は、誰もが皆、同一人物だと信じていた。  
圧政に苦しむ市民の為に、聖母様が少女を遣わした。人々は希望を込めてそう噂する。そしてその噂を信じようとする。

そう　流される噂のままに。  
その噂は、帝国にとつて致命的だった。帝国はなす術もなく、揺れ続けた。

帝国は揺れ動くままに、次の事件を迎えるとしていた。

### 三、アナ斯塔シア・パリハナ・ロマンヴァア 2

月が代わり一月も半ばを過ぎた頃、ある日曜日にノエルはやつと首都に足を向けることができた。すぐにでもきたかったが、母はなかなか許してくれなかつた。

実際多くの市民が怯えて暮らしていた。

ノエルのクラスの何人かも、学校に通つてきていない。あの気丈なアニーですら、今では『血の日曜日事件』と呼ばれるあの惨劇以降、学校で見かけなくなつた。

世話になつたガポン司祭の為に、お祈りを捧げたい。そう言つてノエルは、母を説得した。

ガポン司祭の教会は閉鎖され、兵士が周りを固めていた。市民は遠巻きにしかできない。幾人かの市民が遠巻きにでも祈りを捧げている。ノエルも皆に習つて遠くから祈ることにした。

「……聖母様」

ノエルはガポン司祭の為に、聖母に祈りを捧げる。

祈りを終えたノエルは冬の宮へと向かつた。

もう一度見ておきたい。そう思つたからだ。

母にはすぐに帰つてくるようにと言われている。だが自分の目で確かめたい。その思いがノエルをして、マリーの言いつけを破らせた。

あの日曜日に、何も知らずに人々について歩いた、ネフスキーオリケードや護身用の角材にする為に、市民が壊した暴動の爪痕だ。ノエルはネフスキーオリケードを奥へと歩く。

建物の損傷は次第に激しさを増していった。破壊された上に、多くが火で焼かれている。

いくつかの街角に添えられた花々。そこに書きつけられた祈りの言葉。一心に祈る遺族と思しき市民。

その光景を心に刻みつけながら、ノエルは更に奥へと向かつ。

冬の宮前は一応の静寂を取り戻していた。

だが宮殿の前は増員された衛兵で、近寄りがたい雰囲気を醸し出している。

ノエルは遠くから冬の宮を見つめる。自分が知らなかつたことを知つた血の日曜日事件。今この国に何が起こつてゐるのかを、突きつけられたあの日の惨状。自分にはまだまだ力がない そう思い知らされた魔法皇帝の実力。

冬の宮を後にするノエル。歩きながら魔法の鎌と鎧をイメージした。空手で得物をふるう。

誰よりも鋭く、鎌をふるえるようになりたい。誰よりも強く、鎧をふるえるようになりたい。

ノエルは強くそう思う。そして暇な時間があると、このところ鍛錬にあてていた。

「助けて下さい！」

ネフスキーダ通りの半ばまでくると、ノエルは不意に後ろから誰かに呼び止められた。助けを呼ぶ声だ。少女の切羽詰まつた声だ。

「の人達が……」

助けを求めてきたは、赤毛の少女だった。

輝く澄んだ瞳を潤ませて、少女がノエルに走り寄つてくる。

左右で束ねられた艶やかな赤毛が、一度両脇にフワツと広がつてから肩に向けて落ちていた。その優雅でしなやかな曲線を描く赤毛が、肩が上下する度に大きく揺れる。

「どうしたの？」

「それが……」

「おつとー もう一人増えたな！」

ノエルの問いかけに少女が答える前に、その少女の後ろから下品な声色で男が声をかけてきた。男は三人組だ。三人とも薄汚れた作業着を着ている。

少女を追いかけてきたらしい。手にそれぞれ得物らしきものを持っていた。

「あの人達が…… 私が道で花を売つていたら、革命の資金を寄せつて。私そんなお金……」

「何？ ゆすり？ たかり？ 強盗ね」

ノエルが少女を自分の背中にかくまつた。一人の少女の前に、三人組はいやらしい笑みを浮かべて立ちはだかる。通りをいく市民が、遠巻きに様子を窺つた。

「失礼だな、お嬢さん。俺達は革命の義士でしてね。きたるべき空想科学的社會 何だ？ 何だった？ イーゴリ？」

「さあ？ 何だっけえ？ オレ頭わりいから分からねえや。ねえ、ワシリーの兄貴イ」

イーゴリと呼ばれた小太りの男は、こん棒のような木切れの得物で頭を搔ぐ。へらへらと笑いながら、イーゴリは隣の瘦せた小男に聞き直した。

「俺つちだつて知るかよ。イワン兄が知らないもの、俺つちが知る訳ねえ。いつもふんふん頷いてりやいいつて、俺つちは言われいるもの」

ワシリーと呼ばれた瘦せた男は、手に持つたナイフを神経質に右に左にとやりながら答える。

「役に立たねえな、お前らは……」

イワンと呼ばれたリーダー格の男が、鉄パイプを左の掌に打ちつけながらぼやく。

「何よ？ 結局分からんじやない。ただの強盗ね。こんなか弱い女の子相手にお金せびつて、恥ずかしくないの？ あんた達？」

「いやいや、お嬢さん。今この国で起こっているのはまさに市民革命。市民一人一人の力が、そう市民一人一人のお金が必要でしてね」

「はあ？」

一際震え出した少女を後に躊躇してやりながら、ノエルがあからさまに不審の声を上げる。ノエルは軽く念じ、虚空より魔法の鎌と鎗を呼び出した。必要になりそうだ。

「だからひつして、善意の募金を募っているんだよ。その何とか革命の為に」

「ふん。ろくに革命の名前も言えないくせに……」

「言えるさ。空想科学的社會　何だつけな？　てか、空想科学って何だよな？　まあ、空想でも科学でも、何だつていいんだけどよ。」

「ちとうは」

「はあ？　バッカじゃないの？」

「何を！　イワン兄を馬鹿にすんな！　俺つちと違つてイワン兄は中学校を出てんだぞ！」

「やうだ。オレいつも分け前は、イワンの兄貴にい、計算してもらつてゐるぞお」

「お前ら黙つてろ。わあ、どうせ花をいくら売つても、税金を払う氣もなかつただろ？　それなら革命の為に、その分をこの義士様が使つてやつおつてんだ」

鉄パイプをわざとらしく胸中に隠し、イワンが少女に手を差し出す。

「はあん？」

革命の義士を自称するイワンに向けて、ノエルが鼻を鳴らした。鉄パイプ片手に、年端もいかない少女にお金を要求する義士。そんな義士がいる訳がない。

冬の帝国はデモや暴動で、治安が乱れ出してくる。革命騒ぎによる世情の混乱だ。

弱体化する政府の支配に、便乗して騒ぐ不埒者だらけ。

「お嬢さん。痛い目に遭つ前に、おとなしく言つことを聞きたま」

「ヒイ……」

「何を……」

少女の悲鳴を背に、ノエルが魔法の鎌と鎧を構える。  
そしてノエルが油断なく相手を見据えると

「お止めなさい！」

凜と響く別の少女の声が、街道に響き渡った。

### 三、アナスタシア・ノエリーナ・ロマンウア 3

その凛とした少女の声に、騒ぎを取り囲んでいた市民が一斉に振り向いた。少女は一瞬にして、周囲の視線を釘づけにする。

同性のノエルですら、そう今までに暴漢に立ち向かおうとしたノエルですら、その少女の放つ気品と雰囲気に目を奪われる。

「あつ……」

そしてノエルは苦々しげに咳いた。知っている顔だつたからだ。更に言えば知つていいその顔の持ち主に、一瞬目を奪われてしまったからだ。

少女は質素だが気品溢れるドレスを着ていた。大きく可憐な瞳を陽光に輝かせ、自信に満ちあふれた笑みを浮かべている。よく梳かれていると思しき金髪を腰にふわりと流し、意思の強そうな唇の赤を見せつけていた。これ程の少女はそうはいない。

「ブルジョワ…… またあんたなの？ てか、何でここに……」

そう、その少女はアニーだった。アニーは一步前に出た。

「大の大人が、年端もいかない少女に恐喝とは。恥を知りなさい！」

「何だ、てめえは？」

「私？ 私はアニー。ただの通りすがりよ」

アニーはそう言つと、力強く歩き出す。騒ぎの中心までぐるんと、ノエルと花売りの少女を背にして暴漢と対峙した。怯みも怯えも何もない、やはり凛とした立ち姿だ。

「もう一度言つわ。お止めなさい。でなければ私が相手よ」「何を！」

「イワンの兄貴い！ 生意氣だあ！ やつてやれ！」

「いや、俺つちにやらせてくれ！ いたぶつてやる！」

「ちょっと！ いきなり現れて何カツコつけてんのよ？」

三人組がいきり立たつた。ノエルも一緒になつて声を荒らげる。まるで仲間の一人のようだ。

「危ないわ。あれ？ あなた、ノエルじゃない？ 何してるのよ？」

「こんなところで」

「なつ？ 今気がついたのね！ 腹立つわね、あんたは！ いつも

いつもいつも！」

「まあいいわ、危ないから」

「危ないのはあんたよ。下がつてたら。ブルジョワさんは荷が重

いわよ！」

アニーに頭まで言わせまいと、ノエルはその前にずいっと出た。

「私はブルジョワさんじやないわ、アニーよ。何度も言わせないで。

いいからこには私に」

アニーは更に、そのノエルの前に出ようとする。

「何言つてんのよ！ こには私が助けを頼まれたの！ ブルジョワさんはお呼びじやないの！」

「あなたね！ そんなんへんてこな武器で、何をしきつて言つてみのう！」

「何を！ これは鎌と鎌！ 農具と工具！ 貧農の命の道具に、へんてことは何よ！」

「少なくとも武器じやないじやない！ 下がつてなさい！」

少女一人がいがみ合ひ。どちらが戦つか、声を大にして言い争つた。

「はは、楽しそうだな？ お嬢ちゃん達！」

「何処がだ！」

あきれた様子のイフンに、ノエルが勢いよく振り返れる。

「おつと。怖いね」

イフンはおどけたように掌を向けながら、降参の仕草をしてみせた。その笑みの自信は手に持った鉄パイプだろひ。その硬さを誇示するかのように、掌に何度も打ちつけ始める。

「待つてなさい！ 今、決着をつけるから！」

鉄パイプに怯みもせず、ノエルが相手を睨みつける。

「そうよ！ 黙つてなさい！ いまこの娘と話をつけるから！」

「俺つちは、金髪の娘がいい！」

「オレは兄貴にい、任せるう」

「二人いつぺんに相手してやるよ。かかつてきな！」

イワンが鉄パイプを、威嚇の為か大きく一振りした。わざとらし  
い舌舐めずりの真似までして、得物を構え直す。後の一人もそれぞ  
れに身構えた。

「どうする？ ブルジョワさん？ 足引つ張るのなら、遠慮して欲  
しいんだけど」

「アニーよ。舐めないでね。こつ見えても私、結構強いのよ。知つ  
てるでしょ？」

「ふん。フォローはしないわよ」

「ええ、別に結構よ」

ではと、ノエルは魔法の鎌と鎧に魔力を送る。二つの得物が一瞬  
光に包まれた。

「何？ ノエル？ 今の？」

「氷でコーティングしたのよ。怪我させても、後味悪いしね  
「なるほど……」

アニーが左手を内から外に払った。その手には虚空より現れた、  
一振りのサーベルが握られていた。アニーが右手にサーベルを持ち  
替え軽く念じる。

サーベルがこちらも一瞬光り、その刃が氷に包まれた。

「ちょっと、真似しないでよ」

ノエルが赤毛の少女を後ろに押しやる。赤毛の少女は怯えた様子  
で、後ろに下がった。

その時赤毛の少女が小さくほくそ笑んだことに

「いいじゃない

「よくないわよ

ノエルもアニーも気づかない。

「じちやじちやと！」

イワンはそう叫ぶと、欲望に至んだ顔で前に出た。

### 三、アナ斯塔シア・ニカラウカナ・ロマノヴァ 4

イワンが衆人環視の中、鉄パイプを振り上げた。ワシリーとイーゴリが後に続く。

「フンツ」

「ハイツ」

ノエルが軽々と、アニーが悠々とイワンの一撃を避ける。打ち合わせてもいななのに、奇麗に左右に別れた。すれ違ひ様に、ノエルがイワンの脇腹に鎌の柄の先を突き入れる。

「痛つ！ ぐ……この……」

「あっ、兄貴イ！ この！」

イーゴリがこん棒を振り上げた。体格に似合わず機敏な動きで振り下ろす。ノエルが半身に体をずらして横に避けると、イーゴリは今度は内から外へ横に薙ぐようにふるつた。

「早いじゃない！」

ノエルは左手の鎌の背で、その一撃を上にそらした。その瞬間にイーゴリのお腹が、がら空きになつたのをノエルは見逃さない。

ノエルは右手の鎌をすかさず前に突き出した。下から上へと突き出されたその攻撃は、見事に小太りの脂肪の隙間を突いて鳩尾にめり込む。

「ぐえつ！」

イーゴリがつぶれた蛙のような悲鳴を上げた。そのまま大きな音を立てて崩れ落ちる。

「おおお、お嬢ちゃん！ 僕つちと遊んでくれ！」

ワシリーが当初の目的を忘れたかのような奇声を発し、アニーにナイフを突きつけた。闇雲に間合いも何もなく、ただひたすら振り回す様は、色に狂つた本人の目によく似合つていた。

「ひひひ！ どうだ！ 怖いだろ？」

「その距離で振り回しても、意味ないと思うんだけど？」

アニーは軽くサーべルをふるつた。キンシとこう金属がかち合つ音がして、ワシリーのナイフがあっさりと宙を舞つていた。

「えつ？」

掌を襲つた衝撃に、目を剥ぐワシリー。己の掌からナイフが弾け飛んでいることを悟ると、顔を真つ赤にしてアニーに向かつてくる。

「てめえ！」

「近づかないで」

アニーがそのワシリーの鼻先に、サーべルを突きついた。

「ヒツ！」

「危ないから」

アニーがそう告げると、ワシリーの鼻先にナイフが落ちてくる。刃を下にしたそのナイフは、ワシリーの足下の街路に深々と突き刺さつた。

「ヒイ……」

ワシリーがその場で氣を失つてへたり込んだ。

アニーが鼻で笑つてサーべルを下ろす。

「この！」

そのアニーの上に、イワンの鉄パイプが振り下ろされた。

「アニー！」

ノエルが思わずその名を呼ぶと、アニーは軽やかに振り返る。鉄パイプはアニーの鼻先をかすめて、地面に叩きつけられた。その衝撃に手をしびれさせながら、イワンが毒づいた。

「このアマ！」

「やつと名前を呼んでくれたわね。ノエル」

「何、余裕こいてるのよ！」

「ふふん。だつて余裕じゃない

「てめえ！」

イワンが怒りに震えて、鉄パイプを振り上げる。

「……」

後ろで怯える赤毛の少女が、両手を祈るように組んだ。目も堅く

つむり、一心に何かにお祈りをしているように見える。そう、その腕に隠れた口元が、悪意に歪んでいる以外は

「えっ？」

アニーが驚きに声を上げる。気を失っていると思ったワシリーが、うつむいたままがつしりとアニーの足首を掴んでいた。まるで腕だけ、別の意思が動かしたかのようだ。

「ワシリーよくやった！ くらえ！」

「くつ……」

アニーが唸る。掴まれた足は振りほどけない。振り下ろされる鉄パイプを受け止めようと、アニーがそれでも細身のサーベルを振り上げた。

間に合わない

アニーが相手の一撃を覚悟したその瞬間、

「アニー！」

ノエルが割つて入つて鎧を両手で振り上げた。

ガニッ！

という衝撃音とともに、イワンの鉄パイプが折れ曲がって宙に舞つていた。だが大振りとなつたノエルは、そのままクルッと回つてしまい、イワンに背中をさらしてしまつ。

「てめえ！」

その隙をイワンは逃さなかつた。鉄パイプを弾き飛ばされ、更にしびれる腕でノエルの背中に左手を向ける。

「 ッ！ 魔法？」「

首だけ振り返つて目を剥ぐノエル。魔法で対抗しようにも、完全に背中を見せてしまつている。間に合わない。それでもノエルは障壁を張るべく、己の左手に魔力を集中する。

「くらいな！」

「この……」

「ノエル！」

だが誰よりも早く魔法を放つたのはアニーだった。アニーはとつ

さに左の掌を跳ね上げる。

「ぐわつ！」

巨大な氷の塊が、雨霰とイワンに横から襲いかかる。一際大きな氷塊を顔面に食らったイワンが、目を剥いて後ろに倒れていった。

「ふふん！ どう！ アニー様の魔力！ 思い知つたか！」

「痛いわよ！ 何やつてんのよ、アニー！ 痛いって！」

「あっ！ え、何？ ノエル？ ご、ごめん！」

とつさに放たれたアニーの氷の魔法。とつさが故に狙いが甘かつたそれは、

「痛いって！」

ノエルにも大量の氷塊をぶつけていた。

### 三、アナスタシア・パリハカナ・ロマンヴァア 5

ノエルが呪文を静かに詠唱する。路上で氣を失った男達の上に、多量の冷水が降り注いだ。

「ヒツ！」

暴漢達は悲鳴を上げて目を覚ます。

「まだ相手して欲しい？」

「ヒヤツ！」

ノエルが意地悪な笑みを向けると、イワン達は口々にわめきながら、その場を去つていった。遠巻きにしていた人々から、歓声が上がる。

「あはは！ どうも！ どうも！」

「これに懲りたら、もう一度と悪さしないのよ！」

ノエルが歓声に応え、アニーが暴漢の背中に向けて言った。

「あの…… ありがとうございます……」

赤毛の少女が深々と頭を下げた。体を細かく震わせている。

「いいの。いいの。たいしたことないから。もう祛える必要はないからね。ごめんね。ブルジヨワさんがいなければ、もっと早く片づいたんだけど」

「何よ。ちゃんと二人も倒したじゃない。一人しか倒していないのに、偉そうね、ノエルは」

「私が鉄パイプを防いであげたからじゃない。油断するのが早いのよ、アニーは」

「ぐぐぐ…… だつてあいつ…… 絶対気を失っていたはずなのに

アニーは納得がいかないのか、歯を食いしばった後、一人でブツブツと呟く。

「あの…… 私…… お礼とかできなくつて……」

「いいの、いいの。私はブルジヨワさんに奢つてもらうから

「なつ？ 何でよ？」

「命の恩人ですから私は！ アニーの…」

「ぐぐぐ……」

「本当にありがとうございます…… 私これで……」  
少女はもう一度深々と頭を下げる、走り去る。そして何度もノエルとアニーに振り返り、その度に頭を下げながら街路の向こうへ消えていった。その様子を一人で笑顔で見送ると、

「ピロシキね！」

「くやしー！」

ノエルが嬉しそうに笑い、アニーが悔しそうにほざを噛んだ。

近くの屋台で買ったピロシキを、ノエルとアニーはその側の空き地に入り込んで食べることにした。野積みされていたレンガの上に、二人は並んで腰をかける。

ノエルはホクホクに焼いたピロシキに、目を輝かせてかじりついた。

「ムツハーッ！ おいしい！ 奢りのピロシキってサイコーッ！」

「ふん。よござんしたね」

アニーはふてくされながら、自分の分のピロシキに口をつける。  
「何よ、アニーったら。見るからにブルジョワなのに、この程度の出費で随分と不機嫌ね」

「お金よりも何よりも、あなたに奢らされていいつてのが気に食わないわ」

「あら、そう。ま、分かつてて訊いたんだけどね」

ノエルが殊更笑顔を作つて、アニーにその顔を向けてやる。  
「腹立つー！」

「あははー！ 後、氷をぶつけられた慰謝料に、ボルシチを

「つるさいー！」

「あははー！」

ノエルは笑つてピロシキを平らげると、レンガから飛び降りた。

「さてと……」

ノエルは不敵に微笑むや、魔法の鎌と鎧を虚空から呼び出した。

「何よ？」

「だつてアニーは一人倒していて、私は一人しか倒してないじゃない。数は合わせないとね」

「ふうん……確かに……私もあなたの強さは気になっていたのよね……」

アニーもピロシキを食べ終える。思い出したのは、リックキーを助けた時のノエルの魔力だ。

アニーはそのままレンガから立ち上がり、こちらも虚空からサーベルを呼び出した。二人は同時に己の得物を氷でコーティングし、油断なく構えた。

「へへ……」

「ふふ……」

挑発的な笑みが思わず漏れる。強い。立ち姿だけで分かる。暴漢など比べ物にならない。

ノエルが先に仕かけた。左上から打ち込むように魔法の鎌を繰り出す。

アニーはサーべルで、追い打ちをかけるようにその攻撃を払い除ける。

ノエルは払われた上に、そのままつのめさせられた。

たつた一つの動作で、攻撃を防がれ体勢すら崩されたのだ。

「なつ？」

ノエルは足を踏ん張り、体勢を整え直そうとする。だがその僅かな隙を突いて、その顎の先にサーべルが突きつけられた。避けられない訳ではない。

「だが

「く……」

だがその突きをノエルが身を屈めて避けると、さらに体勢が崩さ

れた。アニーが不適な笑みを浮かべる。ノエルの崩れた重心の先を迎え撃つように、サーベルが切り返された。

「く……」

ノエルはとっさに右腕を跳ね上げる。瞬時に逆さに持ち替えた鎌の柄が、僅かに間に合い、サーベルの一撃を眼前で受け止めた。

ノエルは押し込んでくる相手のサーベルの力を利用し、その刃をはね除けながら、跳ね上げるように上体を戻しやつと自分の体勢を整える。

「 ッ！」

だが姿勢を正し、重心を取り戻したノエルを迎えたのは、間髪を入れない鋭く速いサーベルの一突きだ。

たった今はね除けたばかりなのに、アニーは無駄なく構え直して突いてきた。

「ハツ！」

ノエルは渾身の力で鎌をふるひ。アニーのサーベルを、まさしく目と鼻先で払い除けた。

「く……」

「あら、どうしたの？ 余裕がないようだけど？」

「うるさい！」

ノエルは思わず声を荒らげる。町や村のチンピラを相手にしているのとは、何もかもが違う。攻撃を読まれることも、自身の力を利用されることも、これほど躊躇られるように簡単にされることは、今までノエルは考えたこともなかつた。

「 もらつたわ！」

「痛つ！」

アニーの一振りが、ノエルの右肩を打ち据える。ノエルはあつという間に、一本とられた。

「まだまだ！」

「あはつ！」

その後も面白いようにアニーは攻撃を当てる。実力がそれほど違

うとは、ノエルには思えない。それでもほんの少し何かが足りないだけで、ノエルだけが青あざを作っていく結果になる。

ノエルはついに肩を落としてしまう。それでも相手を睨みつける。

アニーは汗一つかいていないうにも見えた。

「慣れよ。慣れ。ノエルは独りで練習してるんじゃないの？　だから人の呼吸と癖に、慣れないのよ。私は剣術の先生に、個人で教えてもらっているもの」

「ぬぐぐ……ブルジョワね……」

「否定はしないわ。でもあなたはあなたで、そんなおかしな得物使うからよ」

「いいの、私は貧農の娘。私の得物は鎌と鎧。農具と工具が私の武器だもの」

「あつ、そう。でも同情はしないわ。では」

アニーがあらためて得物を構え直す。

その溢れ出る気迫は、敵に相対する騎士でもあるかのようだ。

ノエルは呼吸を整える時間を稼ごうとしてか、

「ちょ、ちょっと……きゅ、休憩よ……」

あからさまに提案した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3027n/>

---

空想科学的・社会意義小説 魔法同志コミュニッ娘 Commun

2011年10月8日03時26分発行